

令和7年度

# 研究のまとめ

研究テーマ

意思決定支援を充実させる教育活動についての研究



神奈川県立鎌倉支援学校

## はじめに

令和7年度校内研究紀要をお届けいたします。本年度も、本校の教育活動に温かなご理解とご支援を賜りました保護者・地域・関係機関の皆様にご心より御礼申し上げます。また、児童生徒一人ひとりの成長に寄り添い、誠実に教育に向き合ってきた教職員の努力に深く敬意を表します。

本校は、令和5年度より三か年計画で「意思決定支援の充実」を研究の柱として取り組んでまいりました。「自分の思いを理解し、比較し、選び、伝える」力は、児童生徒が将来社会で主体的に生きるための基盤です。本年度は最終年として、これまでの学びを深化させ、次年度以降につなぐ重要な一年となりました。

また本校の研究にあたっては、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の研究企画部主任研究員 加藤敦先生から多くのご助言をいただきました。この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

小学部では、富田分類に基づく実態把握のもと、視線入力装置・VOCA・写真カードなどの AAC を活用し、児童の小さな表出を確かな「意思」として受け止める関わりを進めました。視線や表情の微細な変化を共有することで、「伝わった」という経験が増え、学習への意欲に結びつきました。

中学部では、ICT を活用した表出支援が進み、スイッチやアプリを通じて「自分の働きかけで環境が変わる」ことへの理解が深まりました。選択肢を比較して主体的に選ぶ場面が増え、観察記録の共有が進んだことで生徒理解もより精緻になりました。

高等部 A では、縦割りの SC 授業において「チームでの実態把握」を重視し、目標設定と授業改善を組織的に進めました。ICT 活用や環境設定の工夫により、生徒の発信・理解・やり取りの力に変化が見られました。情報共有の仕組みも整い、今後の柔軟なグルーピングに生かせる成果が得られました。

本校高等部では、「性教育」「主権者教育」「防災教育」を体系的に位置付け、生活年齢に応じた学習を通して判断力・意思表明力を育む取り組みを進めました。模擬選挙では情報を比較し判断する体験が深まり、防災教育では体験的な学びを通して災害時の行動を考える姿が見られました。性教育では心身の変化を理解し、助けを求める力を育てることに力を入れました。

分教室では、「選んだ」「決めた」「伝えた」場면을教員が持ち寄り、意思形成・意思表明の観点から整理することで実践が体系化されました。教員一人ひとりの経験が共有知となり、学年間の連続性のある支援につながったことは大きな成果です。

施設訪問では、視力や体調に課題のある児童生徒の「朝の会」を中心に、触覚・聴覚を生かした教材の工夫や、プロタクトイルの考え方に基づく「ことば+α」のフィードバックを導入しました。わずかな声や表情、身体の動きが「意思」として受け止められ、安心して活動に参加する姿が増えてきました。

在宅訪問では、プロジェクター映像や楽器を用いた活動を通して、児童の興味を引き出し、意思決定の力を育ててきました。大画面での疑似体験や、音を感じ取りやすい楽器を使った相互的な関わりにより、自発的な反応が増えてきています。

これらに共通するのは、「意思決定支援は特別な指導ではなく、日常の教育活動に宿る視点である」という認識です。小さな表出を見逃さず大切に受け止める姿勢こそ、主体的な学びの土台です。本研究で得た成果は、今後の教育活動をさらに発展させる確かな礎となります。

本紀要が、児童生徒一人ひとりが「自ら選び、自らの人生を歩む力」を育む教育の一助となることを願っております。今後とも、本校教育への変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

校長 藤田 肇

## 目次

はじめに	学校長 藤田 肇	1
<hr/>		
校内研究の概要		3
校内研究報告		
肢体不自由教育部門		
小学部	「子どもたちが意思決定できる環境を整える ～児童が自発的に発信するための手立て～」	5
中学部	「ICT を活用し、生徒の主体的な発信を増やす」	17
高等部A	「(生徒の)伝え方と(教員の)受け止め方について ～チームでの実態把握に重点を置いた授業実践～」	23
訪問教育		
在宅訪問	「教材教具」共有シート①、『授業の実践』共有シート②	30
施設訪問	「意思決定支援に向けて：～表出を引き出すための授業実践～ ～子どもにとってわかりやすい環境づくり～」	32
知的障害教育部門		
高等部B本校	「生徒が自分で考え、判断し、行動する場面を支えるための授業づくり ～3つの学習内容のカリキュラム検討～」	37
高等部B分教室	「意思決定支援を充実させるための分教室での教育活動」	43
<hr/>		
「子供たちの意思決定の力を育む授業づくり」を通して	国立特別支援教育総合研究所 加藤敦氏寄稿	49

# 校内研究の概要（令和5～7年度鎌倉支援学校校内研究について）

研究研修係

## 1. 令和5～7年度研究テーマ

「意思決定支援を充実させる教育活動についての研究」

## 2. 研究の方向性

- (1) 学校評価報告の中で課題として取り上げられているキーワードや学校運営方針、学校目標に掲げられているキーワードの中から検討し、テーマを設定した。
- (2) 令和5年度から3年計画で研究テーマに沿って “実践を通じた研究・検証” を行いながら教員の専門性の向上と研修ができる内容のものとした。

## 3 意思決定支援とは

- (1) 「意思決定支援」とは、障害福祉サービス等の提供に係る意思決定支援ガイドラインによると、支援の原則は自己決定の尊重であることを前提として、可能な限り本人が自ら意思決定できるよう支援する、ことをいう。
- (2) 学習指導要領では、意思決定について、「個々の児童又は生徒に対し、自己選択・自己決定する機会を設けることによって、思考・判断・表現する力を高めること」とある。
- (3) そこで、本校では研究テーマである「意思決定支援を充実させる教育活動についての研究」について、学校生活の中で、一人一人の子供が思考・判断・表現する力を育てていくために、自己選択や自己決定する体験や経験する機会を、日々の教育活動にどのように取り入れ、実践していくのか、日々の実践を通して研究を行うこととした。

## 4 研究方法

- (1) 全体テーマを受けて、各学部ごとにサブテーマを設定し、テーマに沿った実践を行った。
- (2) 国立特別支援総合研究所の加藤敦先生を外務助言者として招聘し、ご講演や研究日に授業を参観いただきご助言をいただく機会を設けた。
- (3) 1、2年目は中間報告を行い、3年目に研究のまとめを作成した。

### 意思決定支援の定義

本ガイドラインにおける意思決定支援は、障害者への支援の原則は自己決定の尊重であることを前提として、自ら意思を決定することが困難な障害者に対する支援を意思決定支援として次のように定義する。

**意思決定支援とは**、自ら意思を決定することに困難を抱える障害者が、日常生活や社会生活に関して自らの意思が反映された生活を送ることができるように、可能な限り本人が自ら意思決定できるよう支援し、本人の意思の確認や意思及び嗜好を推定し、支援を尽くしても本人の意思及び嗜好の推定が困難な場合には、最後の手段として本人の最善の利益を検討するために事業者の職員が行う支援の行為及び仕組みをいう。

障害福祉サービス等の提供に係る意思決定支援ガイドライン  
厚生労働省、平成29年（2017年）

### 学校教育では・・・

小学部・中学部学習指導要領  
第7章 自立活動  
第3 個別の指導計画の作成と内容の取扱い  
2の(3)のオ

個々の児童又は生徒に対し、自己選択・自己決定する機会を設けることによって、思考・判断・表現する力を高めることができるような指導内容を取り上げること

### 校内研究全校テーマ

「意思決定支援を充実させる教育活動についての研究」

学校生活の中で、一人一人の子供が主体的・意欲的に思考し、判断し、表現する力を育てていくために、自己選択や自己決定する体験や経験する機会を、日々の指導・支援の内容や方法にどのように取り入れ、実践していくか？

日々の実践(授業・子供との関わり、指導・支援)を通じた  
研究・検証

国立特別支援教育総合研究所 加藤先生

作成スライドより(2024.5.2)

## 5 校内研究3年間の振り返り

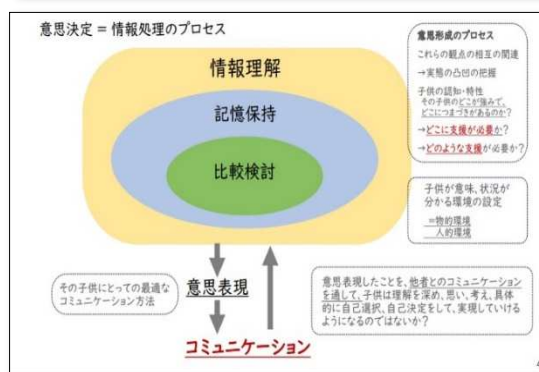
(1) 部門、学部が異なる中で、「意思決定支援」という一つのテーマで校内研究に取り組んだが、その時に大切にしたのは意思決定のプロセスである。

(2) 「～をしたい」と自己選択したり、「～をする」と自己決定したりするためには、前提として意思形成が必要である。選択肢の意味を理解できなければ選択はできず、行動の方法を覚えていなければ実行はできない。したがって、子どもに分かりやすく伝えるために、どのような環境設定や支援が可能かを検討する必要がある。意思表現の段階では、意思を伝える手段として実態に合わせたコミュニケーション方法を選択する。身体の動き等に合わせ、最も意思を表出しやすい方法を検討する。意思形成し、自分に合った方法を通じた意思表現に対し、私たちは「伝わったよ」と応えたり、「合っているよ」と伝えたりしてフィードバックし、コミュニケーションを成立させる。この経験の積み重ねが、自主的な思考・判断、自己選択・自己決定へとつながる。

(3) この意思決定プロセスを各学部で意識し、どの段階にアプローチするかをサブテーマとして設定し、研究を深めた。3年間段階的にステップアップし、最終年度を迎え、各学部の実践研究を本紀要にまとめた。この3年の研究成果を生かし、今後も、子どもが自立し社会参加するために必要な支援・指導を継続し、その可能性をさらに拓いていきたい。

### 意思決定のプロセス

- ・本人が意思を形成することの支援(意思形成支援)
- ・本人が意思を表明することの支援(意思表明支援)



国立特別支援教育総合研究所 加藤先生 作成

スライドより(2024.5.2)

## 6 各学部サブテーマ(令和5、6年度)

### <令和5年度サブテーマ>

小学部：「子供たちが意思決定できる環境を整える～小学部の子供のことを理解する～」

中学部：「表出がより出やすい環境づくり」

高等部A：「気持ちの伝え方と受け止め方～実態把握と目標設定～」

高等部B：「生徒が自分で考え、判断し、行動する場面を支えるための授業づくり」

金井分教室：「分教室における意思決定支援の取り組み」

訪問：「指導記録の作成：意思決定支援のために～表出・反応の様子の情報共有～」

### <令和6年度サブテーマ>

小学部：「子供たちが意思決定できる環境を整える～小学部の子供のことを理解する～」

中学部：「生徒の主体的な発信(意思表出)を増やす～ICT機器の活用を中心に～」

高等部A：「気持ちの伝え方と受け止め方～実態把握と目標設定」

高等部B：「生徒が自分で考え、判断し、行動する場面を支えるための授業づくり」

金井分教室：「集団の中での意思表出支援と関わり～現実世界と仮想世界をつなぐ」

訪問：「指導記録の作成：意思決定支援のために～表出・反応の様子の情報共有～」

## 肢体不自由教育部門 小学部 令和7年度 校内研究報告

### 1、研究テーマ

「子どもたちが意思決定できる環境を整える～児童が自発的に発信するための手立て～」

### 2、テーマ設定の理由

小学部では、児童が意思決定できる環境を整えるための手段について段階的に研究を進めてきた。

1年目は、児童の「実態把握シート」を作成し、学部内で全児童の実態を共有した。このシートをもとに、学部の教員が児童一人ひとりの実態を適切に捉えることで、どの教員がどの児童に関わっても、おおむね等しい教育的支援ができる仕組みづくりをしてきた。

2年目には、児童と教員のコミュニケーション場面におけるエピソードを学部内に周知し、児童の発信の仕方や特性について具体的に示した。これにより児童理解が深まり、さらにそのエピソードを受けて教員が感じたことを出し合うことで、今後身につけさせたい力や指導方法の発展について検討することができた。

3年目の今年度は、児童の自発的な意思表示・意思決定の方法について、児童の実態に応じた手立てや、より意欲的に取り組める手段について検討を進め、誰もが統一した対応ができるように環境を整えていくことを目指した。

### 3、研究の概要

- (1) 学部の児童を富田分類のフローチャートに従ってコミュニケーション能力と移動能力の観点からアセスメントした。
- (2) 「意思決定支援 PDCA シート」に沿って、児童に適した意思決定支援の方法について検討した。児童の様子や興味・関心から、活用できそうな AAC を探り、具体的な場面での目標設定を行った。
- (3) 授業実践後は、「意思決定支援 PDCA シート」に従い、児童の様子や課題点をクラス内で検討し、よりよい取り組みへ改善しながら実践を積み重ねた。
- (4) 実践内容を学部で共有し、対象児童への関わり方を周知した。

#### 4、実践内容

以下、各学年の実践の詳細である。

##### 【 ケース1 】

##### 1、児童の実態と目標

クラス	小5
富田分類	A 言語期    B 命題伝達段階    C 意図的伝達段階    D 聞き手効果段階
	A 歩行    B 車椅子移動    C 床移動可能    D 寝たきり
現在の 意思表出方法	・表情 ・発声 ・注視
興味関心のあること 好きなこと 得意なこと	興味関心のあるもの ・食べ物や飲み物(特に甘いもの) ・特定の音の出るもの(ピアノ?) 得意なこと ・興味のあるものを注視する。
活用できそうな AAC	Tobii EYE Tracker EYEMoT アプリ VOCA スイッチ 味覚、嗅覚 写真絵カード
目標	自分が興味のあるものを見ることで活動へ結び付くことを知る。

## 2、指導の展開

教科・単元	【課題学習】	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・興味のある物を視ることができる</li> <li>・意欲的に活動に取り組むことができる</li> </ul>	
学習活動	意思伝達手段の使い方	実際の意味伝達の様子
挨拶(3分)		
追視アプリでの活動(15分)	EYE tracker EYEMoT 目線を合わせると光ったり、飛行物体が横切ったりするアプリ	動くものや光るものを目で追う様子が見られた
視線で演奏するアプリ(15分)	EYE tracker EYEMoT イラストに目線を合わせると、楽器を演奏するアプリ	興味のある楽器の音が鳴るイラストを繰り返し注視し再生する様子が見られた

## 3、成果と課題

成果、気づき	<p>楽器演奏のイラストを繰り返し注視するなど、視線の動きが視覚化されることにより、想定以上に興味のあるものに対して注視をしていることがわかった。</p> <p>また視線を合わせると音が鳴ることに対して、理解しているような動きが見られた。</p> <p>振動スピーカーを使用した場合としない場合で、音の出るイラストへの興味に差が出ていた。</p> <p>また回数を重ねるごとに、イラストを注視し始める時間が短くなっていった。</p>
課題	<p>視線への効力感を高めるために、継続的な経験の積み重ねが重要である。</p> <p>また次の段階として、実際に視線を生活場面で活用できるような新たな課題の検討が必要である。</p>

【 ケース2 】

I, 児童の実態と目標

クラス	小1
富田分類	A 言語期    B 命題伝達段階    C 意図的伝達段階    D 聞き手効果段階
	A 歩行    B 車椅子移動    C 床移動可能    D 寝たきり
現在の 意思表出方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者の顔を見ながら、喃語や動作で働きかける。周りに合わせて拍手をする。</li> <li>・実物の選択は手に取ることができ、払いのけることもある。</li> <li>・好きな手遊びをしてみせると、「もう1回」とジェスチャーをする。</li> <li>・タブレットで写真を見せるとスワイプしたり、花火のアプリをタップして花火を打ち上げたり、熱心に取り組む。</li> </ul>
興味関心のあること 好きなこと 得意なこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いないいないばあ遊び</li> <li>・粗大運動</li> <li>・タブレットの子ども向けアプリ</li> </ul>
活用できそうな AAC	<ul style="list-style-type: none"> <li>・写真カードの選択</li> <li>・タブレットに映された写真の選択</li> </ul>
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タブレットで提示された2枚の写真を見比べて、やりたいことを選択・決定する。</li> </ul>

## 2、指導の展開

単元	【好きな遊具に乗って遊ぼう】	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分なりの方法で、使いたい遊具を伝える。</li> <li>・揺れや回転を感じ、落ち着いて遊具遊びができる。</li> </ul>	
学習活動	意思伝達手段の使い方	実際の意味伝達の様子
<p>○はじまりのあいさつ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・MT に注目して授業の始まりに気づく。</li> </ul> <p>○大型遊具</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2つの遊具から、乗りたい遊具を選択する。</li> <li>・曲に合わせて、遊具の揺れや回転を感じ取る。</li> </ul> <p>○振り返り</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・感想カードを用いて、本時の感想を発表する。</li> </ul> <p>○おわりのあいさつ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・MT に注目して授業の終わりに気づく。</li> </ul>	<p>○アプリ『ドロップタップ』で提示された2つの選択肢から、一方をタッチで選ぶ。</p> <p>○目の前に提示された2つの遊具から一方を注視することで選択する。</p> <p>○本日の活動について「がんばった」「たのしかった」のイラストカードから感想を選択する。カードをタッチ又は注視することで選択する。</p>	<p>○『ドロップタップ』で写真を見せると、すぐにバランスボールをタップして選択することができた</p> <p>○「がんばった」のカードにタッチすることで選択することができた。</p>

## 3、成果と課題

成果、気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タブレットで選択する経験を重ねることで、実物やカードの選択場面においても払いのけることなく、タッチで選べるようになってきた。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きな活動以外でも気持ちを表出する手段として活用できるようにしていく必要がある。</li> </ul>

【 ケース3 】

1、児童の実態と目標

クラス	小3・4
富田分類	A 言語期    B 命題伝達段階    C 意図的伝達段階    D 聞き手効果段階
	A 歩行    B 車椅子移動    C 床移動可能    D 寝たきり
現在の 意思表示方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発声 朝の挨拶として手を振りながら発声する。</li> <li>・表情 自分の気持ちを相手に笑顔などの表情で伝える。</li> <li>・サイン・ジェスチャー 日直の今日の予定やトイレなどの意思表示ができる。</li> </ul>
興味関心のあること 好きなこと 得意なこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・スクールバス、絵本</li> <li>・カバンのジッパーを開閉し荷物を出す、靴の脱ぎ履き、エプロンやタオルを袋にしま う、給食後のテーブルふき、エアコンのリモコン操作など。指先を使った活動に取り組 んでいる。</li> </ul>
活用できそうな AAC	・ドロップタップ
目標	・ドロップタップを使って見通しを持ったり、自分の気持ちを伝えたりする。

## 2、指導の展開

単元	【課題学習】	
ねらい	好きなものを目指して車いすで移動する。	
学習活動	意思伝達手段の使い方	実際の意味伝達の様子
①好きなものを選んで、行きたい場所へ行く。(二択)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドロップタップを押して選択し教員に伝える。</li> </ul> <p style="text-align: center;">絵本 or バス</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・バス を押して行きたい場所を伝えた。</li> </ul> <p>車いすで移動(玄関へ)</p>
②バスの色(6色)を押して順番に見て回った。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水色、赤、橙、緑、黄色、桃色のシンボルを押して見たいバスの色を伝える。(マッチング)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教員と一緒に画面のシンボルとバスの色を確認してから順番に見て回った。</li> </ul> <p>車いすで移動(各色のバス)</p>
③好きなものを選んで、行きたい場所へ行く。(二択)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ドロップタップを押して選択し教員に伝える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・図書コーナー、絵本のシンボルを押して教員に伝えた。</li> </ul> <p>車いす移動(図書コーナー)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・乗り物コーナーのバスの本を教員と選んで教室に戻った。</li> </ul>

## 3、成果と課題

成果、気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きなもの(絵本、バス)を準備して選択させた。</li> <li>・端末操作に興味があり、意欲的に取り組むことができた。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・タッチパネルへの操作の習熟。</li> </ul>

【 ケース4 】

I、児童の実態と目標

クラス	小2-1
富田分類	A 言語期    B <b>命題</b> 伝達段階    C 意図的伝達段階    D 聞き手効果段階
	A 歩行    B 車椅子移動    C <b>床</b> 移動可能    D 寝たきり
現在の 意思表示方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・名前を呼ばれると胸をたいたり手を挙げたり、「はい」と返事したりできる。</li> <li>・「走る」「おいしい」「痛い」などの言葉を聞いて、動作やサインで表すことができる。</li> <li>・「たべたい」「だめだめ」「バイバイ(おしまい、と同意)」「チッチ」「タイタイ」「エビ」などの発語がある。</li> <li>・やってほしいことがあるときに「ティティ(やって、取って)」と言葉で伝えることができる。また、クレーンで伝えることもある。</li> <li>・見通しが持てないときなどには、不快そうな表情で大きな声を出したり、泣いたりする。</li> </ul>
興味関心のあること 好きなこと 得意なこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体を動かすことが好き。特に、つるつる滑る床で、お尻を軸に回転運動することが大好き。</li> <li>・楽器を鳴らすこと。(太鼓やピアノ)</li> <li>・音楽を聴くこと。(アップテンポの曲)</li> <li>・食べること。</li> </ul>
活用できそうな AAC	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉 ・ジェスチャー、サイン</li> <li>・写真カード、絵カード</li> <li>・VOCA</li> <li>・タイマー</li> </ul>
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・写真カードや絵カード、サインを使って意思を伝える。</li> <li>・順番を知り、見通しを持って落ち着いて生活できるようになる。</li> </ul>

## 2、指導の展開

教科・単元	【自立活動】	
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝の支度の順番を写真カードから自分で選んで決め、見通しを持って取り組むことができる。</li> <li>・写真カードと共に、サインで表現できるようになる。</li> <li>・一つ終わったら、教員と一緒にカードをはがして、終わりを意識することができる。</li> </ul>	
学習活動	意思伝達手段の使い方	実際の意味伝達の様子
<p>○順番を決める。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3つの活動（お茶を飲む、トイレに行く、健康観察カードを届ける）から取り組みたい順番を決め、教員と一緒に確認する。</li> <li>・写真カードと共に、サインもすすよう促す。</li> </ul> <p>○朝の支度</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・決めた活動に取り組む。</li> </ul> <p>○確認</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・一つ終わったら、写真カードをはがして、教員に手渡す。</li> </ul>	<p>○3枚の写真カードを使って、取り組みたい順番にホワイトボードに貼る。</p> <p>○支度に取りかかる前に、写真カードとサインで順番をしっかり確認する。</p> <p>○取り組む前に、写真カードをタッチし、サインでも確認する。</p> <p>○「〇〇おしまいだね」という言葉を聞いて、カードをはがして教員に手渡し、終わったことを確認する。</p>	<p>○「1番どれにする?」と聞かれると、一枚カードを選んでボードに貼ることができた。</p> <p>○「トイレ」の言葉と写真カードを見て、トイレサインをすることができた。</p> <p>○「お茶」と「お仕事」のサインはまだ難しい。</p> <p>○カードをはがすことはわかって、自分ではがそうとしていた。</p>

## 3、成果と課題

成果、気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この順番ボードを使用することで、見通しを持って活動できる様になり、朝の支度で大きな声を出すことが少なくなってきた。</li> <li>・トイレサインは覚えることができた。写真カードを見るだけでサインをすることもできた。</li> <li>・写真カードが薄く掴みにくそうだったので、厚みのあるカードにした方が良い。</li> </ul>
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お茶とお仕事（健康観察カード）のサインも覚えられると良い。</li> <li>・朝の支度以外でも、順番という仕組みがわかり、見通しを持って落ち着いて生活できるようになると良い。</li> <li>・将来的にトイレに行きたいときや、お茶を飲みたいときに、自分からサインが出せるようになると良い。</li> </ul>

【 ケース5 】

I、児童の実態と目標

クラス	小2-2
富田分類	A <u>言語期</u> B 命題伝達段階    C 意図的伝達段階    D 聞き手効果段階
	A <u>歩行</u> B 車椅子移動    C 床移動可能    D 寝たきり
現在の 意思表示方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・認知発達段階は、太田 Stage の評価ではⅢ-Ⅰ程度。2～3語文程度で会話することができる。</li> <li>・自分の気持ちを表現する語彙が少なく、気に入った人に同じフレーズを言って関わりを求めることが多い。</li> <li>・困った時や不快な時に、不適切な発言が多くなる。嬉しすぎる、テンションが高すぎる時も不適切発言が多くなる。</li> <li>・人前での発表が苦手。黙ってしまったり、「～でしょ!」と不適切な発言をしたりすることが多い。</li> <li>・元気な声であいさつをすることができる。</li> <li>・気持ちが安定している時は、教員や友だちの様子を見て「いいね」とポジティブな言葉かけをすることができる。</li> </ul>
興味関心のあること	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おままごとやごっこ遊び。人と関わりを求める。</li> </ul>
好きなこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽、歌うこと、聴くこと。</li> </ul>
得意なこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>・iPad</li> <li>・細かなもの、おはじき等で遊ぶこと。</li> </ul>
活用できそうな AAC	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉 ・ジェスチャー、サイン</li> <li>・写真カード、絵カード</li> <li>・iPad</li> </ul>
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の気持ちを表現する語彙を増やす</li> <li>・肯定的な関わりの語彙を増やす。</li> <li>・教員の質問に答えることで、活動の振り返りを発表することができる。</li> </ul>

## 2. 指導の展開

教科・単元	【自立活動・帰りの会】	
ねらい	<p>・一日を振り返り、頑張ったこと楽しかったことなどをみんなの前で言葉で発表する。</p> <p>・教員の質問に答えることで、活動の振り返りを発表することができる。</p>	
学習活動	意思伝達手段の使い方	実際の意味伝達の様子
<p>1. あいさつ</p> <p>2. 今日の振り返り</p> <p>・本日の日課の中から、話したい授業を一つ選び、一人ずつ発表する</p> <p>3. あいさつ</p>	<p>・日課カードを使用して、活動したことを確認する。</p> <p>・話したい授業を一つ選ぶ。</p> <p>・iPadで実際に取り組んでいる写真を見て、何をしたか発表する。</p> <p>・iPadの Drop Tap を使用し、授業の感想を選択する。 選択肢:①難しかった ②疲れた ③楽しかった ④がんばった</p> <p>・「おわります」と言って終了する。</p>	<p>・話したい授業を選び、単語で言うことができた。</p> <p>・iPad の写真に着目し、教員の問いかけに対して応答した。 遊んだ葉っぱの写真を見せて、散歩に行った話をする場面。 T「何で遊びましたか？」 C「落ち葉」 T「何色でしたか」 C「黄色」 T「他には何色がありましたか？」 C「赤」</p> <p>・ Drop Tap で授業の感想、「楽しかった」を選択することができた。</p> <p>・「おわります」と言うことができた。</p>

## 3, 成果と課題

成果、気づき	<p>・少し止まることはあったが、教員の問いかけに答える等、振り返りの一連の活動を行うことができた。</p>
課題	<p>・少しずつ感想の選択肢が増えてくるといい。</p>

## 5、まとめ

### 実態に応じた AAC 選択の重要性

今回の取り組みを通して、児童の実態に合ったツールを選択し、目標を設定したうえで指導場面に活用することができた。児童の身体機能や表現方法の違いにより、適切な AAC も教員の働きかけも大きく異なる。実践内容を振り返ると、児童と教員のコミュニケーションが会話だけでなく、視覚的な確認を伴うケースが多かった。児童自身にとって、自分の思いがその場で明確に示され、教員に受け止められる経験は、「伝わっている」という感覚を一層強め、心理的な安定にもつながっているように見受けられた。こうした成功体験の積み重ねが、クラスの中で学習することへの安心感を高め、自発的に思いを伝えようとする姿の育ちにつながっていった。

### 意思表出・意思決定する力を将来へつなげる

教員にとっても、児童の実態に合った AAC を活用することで、児童の思いを憶測ではなく、確かなものとして受け止められるようになった。また、適切な支援方法や受け止め方を知ること、他教員へその支援を共有し、広げることができた。児童理解が広がれば、縦割りグループ活動や学部全体での活動でも、どの教員も児童に合った関わりができるようになる。小学部全体としてコミュニケーションが保障されることは、児童が安心して自分の思いを伝えられる環境づくりに直結する。コミュニケーションは、人との関わりの中で育まれるものであるからこそ、クラス担任から小学部の教員へ、さらに小学部から中学部へと関わる相手を広げていくことで、将来、共生社会の中で誰に対しても自分の思いを伝えられる力を身につけてほしい。教員も、先を見据えた児童一人ひとりのビジョンを持ちながら、日々の小さな積み重ねを丁寧に取り組み続けていきたい。

## 6、参考文献・資料

- ・富田朝太郎『富田分類から学ぶ障害の重い子どもへのコミュニケーション支援』2022

## 肢体不自由教育部門 中学部 令和7年度 校内研究報告

### 1 研究テーマ

「ICTを活用し、生徒の主体的な発信を増やす」

### 2 テーマ設定の理由

- (1) 令和5年度は「表出しやすい環境づくり」をテーマに、生徒の意思表示をどのように見取り、引き出すかを探究した。令和6年度はその研究を継続し、主体的な発信を増やすことを目指して、実態把握・観察・評価を中心に進めた。1人1台のiPadを活用し、アプリ「ぼいすぶっく」「えにつき for school」を用いた授業実践を行った。動画記録と複数教員での評価により、生徒の「好き・嫌い」「興味の有無」による表出の違いが明確になった。
- (2) 今年度は昨年度の研究を引き継ぎ、生徒の主体的な発信を増やすことをねらいに、ICTを活用した授業実践を行うこととした。ここでの「増やす」は、①できることを増やす、広げる、②発信する場面、機会を増やす、の二つの意味を持たせた。週に1回の個別課題の時間だけでなく、学校生活の中で発信する機会を増やすことをねらった。

### 3 研究の概要

- (1) 各クラスで対象生徒を決め、富田分類（富田朝太郎『富田分類から学ぶ障害の重い子どもへのコミュニケーション支援』学苑社 2022）を活用し、フローチャートに従って、コミュニケーション能力をアセスメントし、コミュニケーション段階を評価した。
- (2) 担任間で、意思表示、興味のあること、好きなこと・嫌いなこと等の生徒の実態を共有し、シートに記入し目標設定し、実践を行った。
- (3) 月1回の研究日に各クラスで、生徒の様子を共有したり、ICT機器活用のため、iPad アプリ「DropTap」、「ぼいすぶっく」、「DropTone」、MaBee等の研修を行い、授業実践へとつなげた。
- (4) 研修を受け、各授業で生徒の主体的な発信を増やすことをねらいとした、ICTを活用した実践を行った。（これからの実践は「中学部の教材紹介」としてまとめた）

### 4 研究内容・成果

#### (1) 中学部1・2年

##### 【学年】聞き手効果段階

表情や視線、口をぱくつと閉じたりする動きで、YES/NOの表出や2択から選んだりする経験を重ねている。主に下部の活動は課題の時間に設定しているが、覚醒度が下がってしまうことがあり、起きて活動できるように取組時間の調整等が必要である。また覚醒度を上げて活動できるように、音や光、動きがあるものを使い、本人の興味関心や刺激に繋がる必要があると考える。


##### 【活動】

個別課題/身体の一部を動かして、ものを動かす、動かしたことに気づく

##### 【ねらい】

因果関係理解に繋げる

【利用した ICT 機器・アプリケーション】児童・生徒の表出、要求そのものを引き出すツール

iPad、顔スイッチアプリ 、MaBee、スヌーズレンライト、改造マッサージ機、ボタンスイッチ

【成果と課題】

- ① iPad の「顔スイッチ」アプリと MaBee を入れたスヌーズレンライトを繋げて、因果関係理解をはかった。本人の姿勢にもよるが、視線もしくは口の動きに反応するようにアプリを設定した。まず一緒に動かしてみたら、本人の視線の動きや口の動きを促した。覚醒度合いが高いときは、視線を動かしたり、口を動かしたりしてライトをつけることができた。ライトの ON・OFF というシンプルかつ光という刺激的なものを使ったことにより、目の前のライトに注目がいき、操作も促せたのではないかと考える。だが、活動途中で覚醒度が下がってしまい、短い時間の設定で行うという結果となった。自分が意図的に動かしたことによってライトがついたということに気づいたかどうかの評価は、活動回数が想定よりも少なかったため難しかった。今後も活動を継続して行い、撮影した動画を複数教員で観察し、丁寧に評価したい。
- ② スイッチに繋がるように改良されたマッサージ機とボタンスイッチを繋げて、因果関係をはかった。手に力を入れた時に指がボタンに触れる位置にスイッチを設定し、何度か一緒にボタンを押して、動かした(マッサージ機はこちらが本人の身体に触れさせておく)。その後、身体に力が入った時にボタンに触れマッサージ機が動き、連続して動かすことができた。(本人が動かしているときにマッサージ機を足や背中、肩と位置を変えていくこともしてみた。)途中、ボタンを押すことがストップしたが、口をぱくっと動かしたので、それを合図とし、指と一緒に動かしてスイッチを押してみた。その後、何度も口をぱくっと動かす様子が見られた。意図的に力を入れてスイッチを押すことができたかどうかの評価は、①と同様、活動を今後も継続して行い、様々な視点から行いたいと思う。評価をもとにさらなる活動を考えていきたい。

(2) 中学部 3 年

【学年】中3 聞き手効果段階

目的をもって物や人に向かって手を伸ばすことができる。スイッチを目の前に提示すると押すことができる。覚醒度が下がってしまうときがあり、姿勢や環境設定に工夫が必要である。

【活動】

スイッチを押したり、iPadの画面をタッチしたりして、①動画を再生する。②2つから1つ選ぶ。③音楽を演奏する

【ねらい】

- ・スイッチ操作を通して、因果関係の理解をする。
- ・自ら手を伸ばし、スイッチ等を操作する。

【利用した ICT 機器・アプリケーション】

① ぼいすぶっく



② DropTap



③ DropTone



【成果と課題】

本研究では、本人が主体的にスイッチや iPad に手を伸ばし、操作できることを目標に、これまでの研究で得られた「好きなもの・興味のあるもの」を活用した教材を作成した。具体的には、ぼいすぶっくではスイッチを押すと動画が再生される課題に取り組み、好きなグループの MV が流れると両手を積極的に動かす様子が見られた。DropTap では、リンク機能を用いて 2 つの選択肢から 1 つを選び、スイッチで音楽 (YouTube) を再生できる教材を作成した。画面を見比べて好きな方に手を伸ばし選択する動きがみられた。さらに DropTone では、画面タッチで音楽を演奏し、好きな音楽の際により活発な動きが見られた。本人の興味を反映した教材で、主体的な表出を引き出すことができた。今後は、興味の幅を広げるために教材の工夫を重ね、より多様な活動を引き出すことを目指していきたい。

## 5 まとめ

### (1) 自分がきっかけで環境が変化する経験を積めるようにする

I C T機器を活用し主体的な発信を増やす実践を積み重ねたが、そこで意識したことは「自分がきっかけとなって、周囲の物や環境が変化する経験」である。「スイッチを押したら、好きな音楽がなる、玩具が動く」、「スイッチで選択して、やりたいことができる」、このような学びを日々の授業から積み重ねることで、主体性や自分がやりたいという意欲、伝えたい気持ちにつなげたいと考えた。

### (2) 生徒が「関わりたい」と思える存在に私たちがなる

日々の実践を研究として行ったが、その前提として、学部  
の教員全員が人権を大切にしたい関わりを通して、生徒と信  
頼関係を築き、生徒が安心感を抱ける、「関わりたい」と思  
える存在になることも大事にした。生徒の意思表出や発信  
を良く見て、記録し、チームで共有し、想いや考えを想像し  
続けたい。より分かってほしいという姿勢を持ち続けること、気持ちに共感することを通して、より生徒  
が主体的に発信できるような人的環境づくりにも努めたい。

### (3) 意思決定支援は「環境づくり」である

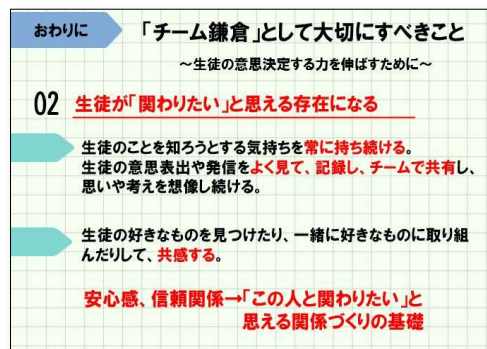
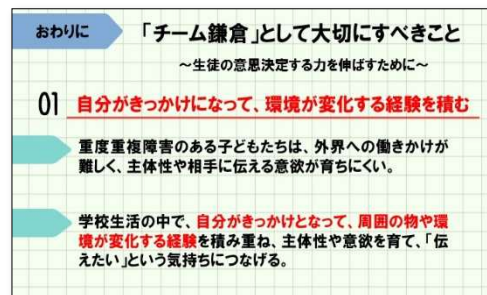
生徒が「〇〇をしよう」と決めて意思を示す  
には、右図のように「入力（分かる）→考える→出力（伝える）」という過程を経る必要がある。本研究では各段階においてどのような  
支援が必要かを実態に合わせてチームで検  
討した。I C Tを活用した実践においては、  
出力支援として個別に適したスイッチを準備  
するだけでなく、活動内容を分かりやすく提示し、理解しやすく、考えやすい環境も整えるよ  
うにした。こうした環境づくりは生徒の意思決定を助け、主体的な発信を増やし、そのことが「伝  
えたい」「やりたい」という主体性、意欲につながる。今後も一人ひとりの実態に合わせた意思決定  
しやすい環境づくりを、日々の教育活動からチームで継続して観察・検討を繰り返しながら、総合  
的に丁寧に進めていきたいと思う。



加藤敦氏作成 鎌倉支援学校校内研究全体会スライドより(2024.5)

## 6 参考文献・資料

- ・ 鎌倉支援学校校内研究会スライド資料 2023, 2024, 2025（特別支援教育総合研究所加藤敦氏作成）
- ・ 徳永豊・田中信利 『障害の重い子どもの発達理解ガイド』 2019
- ・ 富田朝太郎 『富田分類から学ぶ障害の重い子どもへのコミュニケーション支援』 2022
- ・ 日本肢体不自由児協会 『肢体不自由児のためのタブレット PC の活用』 2015



中学部 鍛冶川作成 第70回全国肢体不自由教育研究協議会

## 中学部の ICT を活用した教材紹介①

### 「スイッチ、ピッチングマシーンを使ってジャンプ！」

SC

(国語、社会、自立活動)

「鎌倉フレンドパーク」をテーマに授業を行いました。トランポリンを使って壁に張り付くゲームをイメージし、ピッチングマシーンとスイッチを用いて人形をとばすゲームを行いました。

## 01 教材のポイント

### 【ピッチングマシーン】

スイッチを押すとピッチングマシンのアームが動き、人形をとばしてくれます。人形の置き方によって飛び方が変わり、ゲームが盛り上がりました。

ピッチングマシーン

②棒スイッチを引っ張り、  
ピッチングマシーンが動く

### 【スイッチ】

スイッチを「押す」ことが難しい生徒は、iPad の「顔スイッチ」と「MaBeee」を連携させ、まばたきや口の動きで犬のおもちゃを動かして、棒スイッチを反応させて人形をとばしました。

①「顔スイッチ」で  
おもちゃが動く



## 02 実践者より

### 【自分の動きで活動する】

なるべく「自分の動き」で活動することをねらいにして、この授業を展開しました。上記の機器を活用することで「自分の動き」でゲームに参加できる場面が増えました。このような活動を積み重ねて、「主体的に活動すること」につなげていければと思います。一方、連携させる機器が多い分、「因果関係の理解」という点では課題が残ると感じました。



## 中学部の ICT を活用した教材紹介②

### 「DropTone を使って、曲あてクイズ！」

SC  
(国語、社会、自立活動)

SC の授業の中で、曲あてクイズを行いました。生徒たちが関心のある曲を事前に、DropTone のアプリで、教員がメロディーを作成し、曲あてクイズを行いました。

## 01 教材のポイント

### 【DropTone】

画面上には自由な場所に演奏用のボタンを置くことができ、指先が自由に動かさなくても、動かせる範囲にボタンを設定できるので、必要のない音を鳴らしてしまったりすることなく、自分が狙った音を奏でることができます。



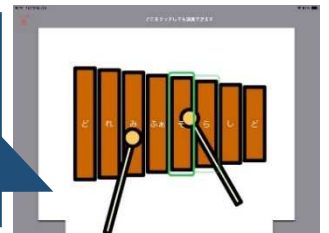
### 【活動の様子】

生徒の好きな曲「わたしの一番かわいいところ」「川の流れるように」のメロディーを事前に入れておき、生徒と一緒に鳴らす楽器や曲を選び、画面をタッチして演奏した曲を他の生徒が曲名を当てる活動をしました。何の曲が流れているのか、よく耳を澄ませて聞いていました。選んだ楽器や演奏者の鳴らすリズムによって、知っている曲でも違う曲に聞こえて、授業の中でも盛り上がりました。

事前にメロディー  
を入れます。



画面のどこを触  
っても、マリンバ  
の音色で演奏が  
できます。



## 02 実践者より

### 【誰でも楽しんで演奏することができる】

ピアノにオルガン、木琴、鉄琴・・・等。色々な音色を手のタップだけで、音色通りに演奏することもできます。生徒一人一人に合わせて、演奏することが可能でとても汎用性の高いアプリだと感じました。1人で演奏や、画面上に複数の楽器を配置してみんなで合奏、外部スイッチを加えたりして、演奏することもできるので、今後、色々な使い方を共有し授業に反映させていきたいです。

教員で協力し、曲を作りました。



## 中学部の ICT を活用した教材紹介③

自立活動

### 「スイッチを用いた活動場面を増やす実践」

中学部3年生の腕を動かすのが得意でゲームが好きな生徒を対象に、課題の時間をメインにスイッチを使った様々な学習に取り組みました。

## 01 教材・活動のポイント

【スイッチを使用した活動(一部)】



① デジリハ  
スイッチでデジリハに取り組みました。「きらきらジュエリー」では画面に注目し、スイッチ操作ができました。

② DropTap での選択

毎朝「お茶・トイレ」のどちらかをスイッチで選択しました。スイッチをボードに固定し、操作しやすいよう工夫しました。



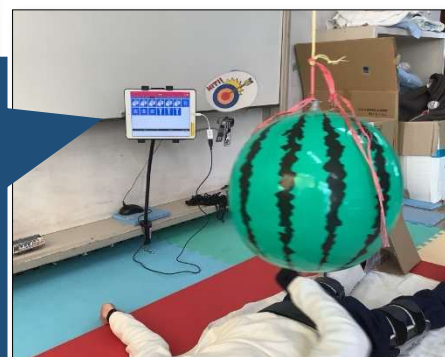
③ ボールを的に当てる

棒スイッチを iPad につなぎ、的に当たると効果音アプリの音声がなります。腕を動かして上からつるされたボールを狙いすまして動かしました。



④ 誰でも野球盤 3D

スイッチで操作し、好きな野球ゲームに取り組みました。



## 02 実践者より

iPad や PC は右の①か②の教材を用いて、外部スイッチで操作できるようにしました。本人が操作したことによる結果(スイッチを押したら音楽が鳴る等)が分かるよう、活動中は静かに見守り、本人の様子をよく観察した後、フィードバックをするよう心掛けました。本人の得意を今後ももっと引き出せるようにしていきたいです。



①改造マウス+  
カメラアダプタ



②改造 Bluetooth  
キーボード

## 肢体不自由教育部門 高等部 令和7年度 校内研究報告

### 1. 研究テーマ

「(生徒の)伝え方と、(教員の)受け止め方について～チームでの実態把握に重点を置いた授業実践～」

### 2. テーマ設定の理由、研究の目的

前年度は、認知発達と同程度である小集団において授業研究を行い、実態に即したコミュニケーション手段の獲得についての検討を行った。認知発達ごとに「コミュニケーション」の捉え方は変わってくるが、どの段階においても ICT 機器が有効な教材になりえることが分かった。その一方で、ICT を利用することが目的化し、ICT 機器を使うための授業づくりになってしまうことが課題として挙げられた。国立特別支援教育総合研究所の加藤先生は、ICT 導入期においては、教員の意識改革や、土壌作りのために ICT 機器を活用する授業を増やすことが大切であるとしたうえで、次のステップは、子どもに育みたい力から、何を教えたいか、どのように教えるかを考えることが大切であると今後の授業づくりへの道筋についてご助言を下さった。

また、反応や変化が読み取りづらい生徒の実態把握において、生徒にかかわる複数の人の視点で、情報交換・共有をすることが重要であるとし、「チームでの実態把握」がポイントとして押さえられた。肢体不自由部門高等部の現状として、様々な働き方の教員がいる中で、情報共有の時間が少なく、特に異学年の教員で編成された縦割り授業におけるチームでの実態把握については課題がある。

そこで、改めて縦割り授業におけるチームでの実態把握に重点を置き、「生徒に育みたい力から発信する授業づくり」、「生徒の実態の変化から考える授業改善」を狙いとして学部研究を行うこととした。

### 3. 研究の概要

肢体不自由部門高等部では「国語」「社会」「情報」「自立活動」を合わせた指導として「ソーシャルコミュニケーション」(以下 SC)を設定している。SC では、認知発達の実態別に 1～3 年生を 5 つのグループに編成している。本研究は、知的代替の教育課程で学習をしている I グループを除いた 4 つのグループを対象として以下のような流れで行った。

1 学期	「目標設定シート」を基に、現在の意思表示、現在の言語理解(分かっている言葉やサイン)、これから分かりそうな言葉やサイン、現在できるやりとり、興味関心のあることや好きなこと得意なことをアセスメント(※1)する。アセスメント結果から、SC の授業における課題(これから一番伸ばしたい事)を定め、授業づくりにつなげる。
2 学期 ～	それぞれの生徒の課題に沿った授業づくりを行い、授業ごとの生徒の様子を記録する。可能な限り授業場面を撮影し、学部全体で授業の様子を共有する時間を設ける。
3 学期	これまでの授業改善の流れ及び成果と課題、1 年を通した生徒の実態の変化について「まとめ様式」にまとめ、グループごとに発表する。

※1 グループによっては、目標設定シートの記録に当たり、NC プログラムや遠城寺式乳幼児分析的発達検査アセスメント等の客観的な指標を用いて実態把握を行った。

### 4. 研究内容、成果

以下は、各グループでの取り組みについて記したものである。

## Ⅱ・Ⅲ-1 グループ

生徒の実態
-------

VOCA や発声などその時に適した方法を選ぶことができる生徒や、発声や表情での Yes/No 伝達や簡単なサインでのやり取りが可能な生徒がいる。それぞれの生徒に興味関心のあるコンテンツがあるが、家族等、身近な人の影響が大きく、自ら興味関心の幅を広げていくことは難しい。情緒は体調等により左右されることもあるが、基本的に安定している。他者への意識はあるが自分から積極的に関わることは少ない。簡単なゲームのルールや勝敗を理解することができる。



生徒の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発音の不明瞭さや伝える手段の少なさから日常生活におけるコミュニケーションは支援者発信の受動的で限定的なものになりがち。</li> <li>・勝敗のあるゲームで思うようにならなかったときなど、気持ちの切り替えが難しい。</li> </ul>
生徒の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒自ら発信していく機会と手段を増やす。</li> <li>・生徒同士のコミュニケーションを増やす。</li> </ul>



単元名	すごろくゲームをしよう！
授業のねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・手順や順番を守る。</li> <li>・止まったマスの指示を楽しんで受け入れることができる。</li> <li>・友だちのことを考えて適度な関わりをすることができる。</li> </ul>
教材教具等	さいころ、きりふき、シール等、Excel・スイッチ・iPad(互いの写真撮影)



指導の流れ (改善の流れ)	<p>○環境設定について:単元の始めの授業では、サイコロを振るたびに、サイコロの目の数のスイッチを押して進めていた。スイッチを押すのに時間がかかり、ゲームが進まないため、2回目以降は教員がマスを進めることにした。初回は、すごろく中にBGMをかけていた。BGMが気になってしまう生徒がいるため、それ以降はなしにした。</p> <p>○友だちと関わり:霧吹きをかけられるときに、誰にやってほしいか、選ぶようにした。</p>
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・回数を重ねるにつれて順番やルールへの理解が深まった。</li> <li>・友だちの番の時に友だちのことをよく見るようになった。</li> <li>・それぞれの身体の特徴に合わせたスイッチを利用していたが、設定に時間がかかってしまうところが難点。それぞれの課題を意識しすぎると、個々での活動場面が増え、集団で授業をしている良さが半減されてしまう。</li> <li>・聴覚優位で周囲の音に気が散ってしまう生徒がいて、環境設定が難しい。</li> </ul>



生徒の実態の変化
----------

- ・授業開始時の号令を挙手制で決めていて、いつも同じ 2 人の生徒が取り合っていたが、2 学期末になり、初めて友だちのことを指さし、譲ることができた。授業外でも、2 人でかかわりあう場面が増えた。
- ・ゲームに負けると気にしすぎてしまう生徒がいたが、何度もゲームの活動を繰り返し、「負けても楽しい」経験を積んでいくことで勝敗を気にしすぎなくなってきた。
- ・年間を通しての変容があまり見られなかった生徒が 1 名いて、情報量が本人にとって多かったのだと察し、来年度のグルーピングを検討する。

### Ⅲ-2グループ まとめ

生徒の実態
-------

クレーン動作や、写真カード、発声、視線など言葉以外の手段で意思表示をすることができる。それぞれの生徒に好きなことがあり、好きなことに取り組む意欲が高い。一方で、興味関心の幅が限定されており、わからないことや苦手なことがあった時に声を出して怒ったり、離席したりして、やりたくない気持ちを伝えることもある。伝えたい意思が明確で、伝える意欲が高い生徒が多いが、普段から関わりのある人でないと、伝えることが難しい。繰り返し同じ活動を行うことで他者を意識できることもある。集団活動の中で他者とのやり取りを目指すグループである。



生徒の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・決まった担任でないと、気持ちを伝えられないことがある。</li> <li>・簡単なルールの理解(順番を待つ、自分の番が来たら前に出る等)を目指したい。</li> <li>・友だちのことは見たり、待ったりすることが難しい。</li> </ul>
生徒の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡単なルールの理解(順番を待つ、友だちに注目する、自分の番が出たら前に出る等)</li> <li>・担任でない教員にも自分の気持ちを伝える。</li> </ul>



単元名	的を狙って…
授業のねらい	<p>A 目線や身体の動きで狙う的を教員に伝えてことができる。</p> <p>B 順番が来るまで待つことができる。</p> <p>C 狙う的を手元のカードを選択することで伝えることができる。</p>
教材教具等	的 アーチェリー Chromebook



指導の流れ (改善の流れ)	<p>的に当たった時に流れる動画はそれぞれの生徒が好きなものを用意した。</p> <p>いつ投げるか(タイミング)、どこに投げるかは生徒の選択に委ねた。</p>
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動の内容を理解し、自分の好きなものの貼ってある的を狙って打つ生徒がいた。的当てでは、狙っても思ったところに当たらないことがあるが、それでもほかの動画を落ち着いて見たり聞いたりしている様子が見られた。</li> <li>・他の友だちが好きな動画に興味を持って見ている生徒もいた。</li> <li>・順番を待つことについては、課題(寝る/声を出して怒る)が見られる。</li> </ul>



生徒の実態の変化
----------

- ・一緒に活動を行う教員を代えても、それぞれ指差し、視線、表情で伝えることができるようになってきた。慣れた担任以外に伝えることに対して消極的だった生徒も、徐々に表出が増えてきた。
- ・1年前は授業中に離席をしていた生徒が、1時間通して活動に参加することができた。グループのメンバーが3人で順番の見通しがもちやすかったこと、同じ内容を繰り返し行ったことで活動内容が分かったことが要因と考えられる。

SCⅢ-3 グループ まとめ

生徒の実態	泣く、笑う、声を出す、身体の一部を動かす等の手段で快/不快の感情を表出することができる。給食の際や好きな遊びを要求する等、限定的な場面では、やり取りが成立することもあるが、自分から発信することは少ない。「ごはん」「トイレ」等、日常生活でよく使う言葉は理解している生徒や、言葉と一緒に具体物を提示することで、理解できる生徒が多い。
-------	--



生徒の課題	それぞれ、声を出して自分の気持ちを表出することができるが、人とのやり取りというよりは、一方的な感情の表出になりがち。
生徒の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・因果関係を理解する。</li> <li>・決まった場面で声を出して人とやり取りする。</li> </ul>



単元名	「だるまさんが〇〇し…『た』」であそぼう
授業のねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・呼応に応じて返事をする事で自分の存在を示す経験をもつ。</li> <li>・発声すると楽しいことが起こるという経験を通して、因果関係の理解、発声でのやり取りにつなげる。</li> </ul>
教材教具等	手拭き用タオル ビッグマックスイッチ 音楽



指導の流れ (改善の流れ)	<p>授業開始時の呼名は、毎回続けた。</p> <p>「だるまさんが〇〇し…」の掛け声で、「た」という生徒の発声を促し、発声すると「楽しいこと」が起こるゲームを実施した。「楽しいこと」の内容や長さについては、生徒の反応を観察しながら変化させていった。</p>
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めは何をやっているか分からない様子で促されても発声や手の動きが出ない生徒が多かった。繰り返し活動を行うことで、ボタンを押す/声を出すと何かが起こることに気がついてきている。本人たちにとって「楽しいこと」が長く続くようにしたことで、促される前から声を出さず生徒が増えてきた。</li> <li>・1人ずつ順番にゲームを行ったが待ち時間が長く、寝てしまう生徒や怒る生徒がいた。</li> <li>・「楽しいこと」の中に準備に時間がかかることを設定していたため、「た」と発声してから、「楽しいこと」が起こるまでの時間にタイムラグがある。(→その後レスポンスが早くできるように、工夫をし、1時間の授業の中で発生する回数を増やした。)</li> </ul>



生徒の実態の変化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「た」と発声することで「楽しいこと」が起こる、という因果関係については全員の生徒が理解を示し、発声できるようになっていった。1名のみ、様々な方法を試しても「楽しいこと」が物足りなかったのか、怒り出してしまふ生徒がいたため、今後のグルーピングを検討する。</li> <li>・朝の会や日常生活場面等、SC以外の時間でも声で返事をしたり、発声でレスポンスをする回数が増えた生徒が複数名見られた。発声して反応するところまでは至らなかった生徒も、やり取りを促されていることが分かり、教員の目を見つめたり、口を動かしたりして、反応ができるようになった。</li> </ul>
----------	--

## SCIVグループ まとめ

生徒の実態	与えられた刺激に対して、眼球を動かす、身体をバタつかせる、呼吸が深くなる等、わずかな変化で感じたことを表出できる。快の時に笑顔になったり、欲しいものがあつた時に手を伸ばしたりできる生徒もいる。二項関係が未成立な生徒も多く、自分以外の他者や物など、外界に意識を向けることが難しい。支援者が本人の思いを推測して関わるコミュニケーションの段階で、慣れている教員であれば、表出を読み取ることができる。
-------	--



生徒の課題	情報量が多すぎたり、逆に刺激が弱すぎたりすると、覚醒度の下がる生徒が多い。一度に与える刺激を限定することで、意思表示の基礎となる意思形成を目指す。
生徒の目標	・2択から選択する ・いろいろな感触、刺激を受け入れ興味のあるものを増やす



単元名	季節を感じよう～秋～
授業のねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見たり聞いたりする活動を通して、内容を感じ取ったり理解したりする力を高める。</li> <li>・触ったり身体を動かしたりして関わろうとする意欲を高める。</li> <li>・集団での活動を通して、教員や友だちとやりとりする力を高める。</li> </ul>
教材教具等	果物、葉、植物(イミテーション)、支柱、パネル、オーガンジー、ライト、アロマオイル、ディフューザー Chromebook



	<ul style="list-style-type: none"> <li>・始まりの歌は、年度当初から繰り返し行なっている活動で、生徒も流れがわかって来ていて呼名に対する反応が良くなってきている。教員も、繰り返し行うことが大切なグループであると共通認識している。</li> <li>・この単元では、他の学年の教員が生徒についた。単元を通して教員と生徒の組み合わせは変えず、生徒の変容が観察できるようにした。</li> </ul>
成果と課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・果物や野菜の種類を沢山用意したため選ぶのは難しそうだった。一部の生徒は、気に入った野菜ができて毎回同じものを選ぶ様子が見られた。</li> <li>・スヌーズレンは好きな生徒が多く、覚醒度が低い時もオーガンジーを動かすと目を動かして教材に注目する様子が見られた。</li> <li>・表出の読み取り(快なのか、不快なのか)が難しい生徒がいる。</li> </ul>



生徒の実態の変化	ほとんどの生徒は本単元内の変化はあまり感じられなかった。しかし、年間を通して行った歌を交えた呼名では全員の生徒が何らかの表出で反応するようになった。同じく年間を通して行ったスヌーズレンでは回数を重ねるにつれて期待感をもって授業に参加している生徒が増えた。3年間同じグループに所属する3年生は、SCの授業に見通しをもち、SCの教室に移動すると覚醒するようになった。1年間では大きな変化が見られなくても長いスパンで授業計画を立てていくことが生徒たちにとって積み重ねになり変化につながると考えられるので今後の授業に活かしていきたい。
----------	---

## 5 まとめ

各グループの実践を共有した後の話し合いの場では、以下のような話し合いがなされた。

### ① Ⅱ、Ⅲ-1～環境設定、友だちとのかかわりについて～

音が刺激になり、集中できない生徒がいるが、授業において音を完全に排除することは難しい。雑音には配慮しつつ、本人にとって物事を理解する手段となっている「音」を活動の手がかり、きっかけになるように活用するべきではないか。生徒の座席配置も工夫することができる。お互いのことを見られる、触れられる距離感にすることが大切である。生徒にとっていきなりグループの友だち全員と関わることは難しい。まずは興味関心をもつ対象を一人に絞ってもよいのではないか。お互いの好きな音楽を一緒に聞く、本を読むなど、教員が間に入りSCの授業だけでなく、授業外での関わりも大切にしていきたい。

### ② Ⅲ-2～待つことについて～

本グループの生徒の好きなものと嫌いなものが明確であるということは評価できる点である。嫌いなことや興味のないことを待つことは大人でも難しい。また、「待つ」に重点を置きすぎると諦めや無力感に繋がりが、主張する力が弱くなる可能性もある。どのような行動を取れていれば「待っている」と評価できるのか考える必要がある。また、「待っていないとき」こそ、生徒が本当はどんなことがしたいのか、引き出せるチャンスになる。そして、教員の説明が本当に生徒のためのものになっているか、改めて考えていきたい。

### ③ Ⅲ-3～授業のねらいについて/因果関係理解について～

具体的にどのようなこと行動があったら達成と言えるのか、生徒一人ひとりのねらいから授業のねらいを精査する必要がある。(※当初の目標には、「～参加する」「～主体性を高める」というものがあつた。この話し合いを経て、「声を出してやり取りをする」「因果関係を理解する」という具体的な目標に変わっていった。)理解を促すための効果的なフィードバックについて、生徒が行動を起こしてから事象が起きるまでのタイムラグをできるだけ少なくできるように Mabeee などの ICT 機器を活用したり、風や霧吹きなどすぐにできることを準備する。また、その刺激が生徒にとって本当に「楽しいこと」になっているか考えていきたい。

### ④ IV～わずかな表出の受け止め方～

表出の受け止めの指標の一つとして心拍数が挙げられる。自発的に動かせる身体部位がほとんどない生徒たちは心拍で実態把握してみることも一つの手段と言える。また、表出について、すぐに快か不快か決めつけず長いスパン同じ展開の授業を繰り返して、記録を積み重ねていくべきではないか。複数の視点から生徒を見るために他学年の教員と一緒に活動する意義はあるが、関わりが浅いと表出を受け止めきれないことがありそうだ。教員同士で綿密に情報共有をするのはもちろんのこと、実態に合わせて、じっくりと関わる必要がある。

上記のように、各回の話し合いでは、授業作りの仕方、ねらいの立て方、生徒と関わる際の教員の姿勢など指導の根本について学部間で意識の統一を図ることができた。ICT 機器を含め、必要な支援、教材教具についても改めて精査することができ、「生徒に育みたい力から発信する授業づくり」の第一歩となった。

また、グループ内で生徒の実態と目標について話し合う時間を確保したことで、担当学年の生徒だけでなく、グループ内の全生徒について支援方法や指導のねらいを把握した上で関わることができた。

さらに、実態の変容に着目して生徒を観察したことで、所属するグループを再検討すべき生徒が数人出てきた。生徒の目標や実態の変化に応じて、年度内であっても学期ごとや単元ごと等、柔軟に所属グループを

動かすことも検討していきたい。グルーピングについて再考する機会を設けられたことで来年度以降の、縦割り授業の在り方について考えるきっかけとなった。

そして、副次的な効果として様々な働き方の教員がいる中で、情報共有の方法について各グループで工夫がなされた。例えばIVグループでは、隙間時間を活用した情報共有を行っていた。略案の各生徒の目標欄の横に、ねらいの達成状況を記す欄を設け、授業での振り返り場面時に1～2行程度簡潔に生徒の様子を記入し、メインティーチャー(以下 MT)に提出していた。MT がそれを1つの表に打ち込み、次の授業までにそれぞれの生徒のねらいの達成状況が共有できる仕組みが構築された。多様な働き方の教員がいる中で、情報共有のあり方については様々な課題があるが、課題解決の一つの方法を見出すことができた。

今年度の成果を踏まえ、今後もチームで協働し、生徒を中心に置いた授業作りに注力していきたい。

## 6 参考文献・資料

- ・鎌倉支援学校校内研究会スライド資料 2024(外部助言者 特別支援教育総合研究所加藤敦氏作成)
- ・徳永豊・田中信利『障害の重い子どもの発達理解ガイド』2019
- ・富田朝太郎『富田分類から学ぶ障害の重い子どもへのコミュニケーション支援』2022
- ・津田望 東敦子「NC 認知・言語促進プログラム 活用マニュアル・発達アセスメント・指導プログラム」1988

## 在宅訪問教育 令和7年度 校内研究報告

第3回訪問研究協議会「教材教具」より

### 「教材教具」共有シート①

意思決定に向けて…児童の持っている感覚を活用し、興味関心を引き出すことのできる活動を設定した。外出する機会が少ない児童にとって、疑似体験的な活動ではあるが、小さなタブレットを見るよりも、大きく映し出し、スピーカーを通して立体的な音楽を聞くことで、日常とは違う雰囲気水族館の映像を見ることができ、体験的な活動として取り組むことができた。本人の興味関心を引き出し、本人が意欲的に取り組める活動になった。

教材名	プロジェクター、水族館の動画
使用場面	遠足事前学習（水族館） 在宅訪問教育にて
教材、アプリ等の写真やイラスト	<div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 20px;">  </div> </div>
使用方法やおすすめポイント	<p>前回の訪問教育研究協議会で紹介のあったゆめ水族園の実践を参考に、本校にあるプロジェクターで泳ぐ魚の動画を音楽付きで鑑賞した。</p> <p>スクリーンは、自宅の壁が白だったので、壁に投射した。プロジェクターの設置は、ベッドサイドに高さを調整できるサイドテーブルを置き、その上にプロジェクターを置いた。ベッドの柵の影が映らずに投影できる高さや角度に調整したところ、本人の見やすい距離で投影することができた。また、右側臥位に姿勢を整え枕の位置を調整すると、より楽に見ることができた様子だった。映像を投射しながら調整をしていると、注目しようと視線を動かす様子が見られた。</p> <p>部屋の照明は消灯し障子を閉め薄暗くしてもらうと、ある程度はっきり映し出すことができた。左から右へゆっくり泳ぐ魚をよく目で追っていた。</p> <p>音響については、プロジェクターのスピーカーを通して立体感のある曲が流れ、映画館にいるような雰囲気で保護者の方と一緒に鑑賞することができた。</p> <p>遠足の事前学習で取り組んだが、体調不良で遠足に行くことはできなかった。しかし、自宅でも水族館の魚を見るような雰囲気を味わうことができたので、体験的な活動としてプロジェクターを使用する鑑賞活動は教材として有効だと改めて感じている。今後も、布やボードを使うことで本人の近くに映し出したり、他の動画でも取り組んだりしてみたい。</p>

『授業の実践』共有シート②

意思決定に向けて…活動の中で、実態に応じて分かりやすい感じ取りやすい働きかけを心がけ、選択の機会を設定して本人からの発信を受け止めながら授業をすすめた。その積み重ねが意思決定に向けた力を育むことにつながる。また、母学級の教員や友人との関りによって、活動の幅が広がった。

教科名	①創作 ②音楽 ③鎌フェス
単元名（題材名）	①季節の作品作り ② ③鎌フェスでの発表
使用教材	<p>①母学級での創作活動の材料</p> <p>②オーシャンドラム、サウンドブロックなど</p> <p>③引っ張るとボールが転がる仕掛け、手作り楽器など</p> <p>※母学級との交流を重ねるために、朝の会や授業など双方向通信でつながって授業を取り組むこともあった。</p>
授業の展開、 教材の使い方	<p>①図工や創作、美術など母学級で取り組んでいる内容を、訪問教育で取り組む。母学級と同じ内容に取り組むことで、一緒に展示ができたり、活動にひろがりができたり、作品を共有することで訪問での様子を知ってもらえた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>②オーシャンドラムやサウンドブロックなど軽くて近くで音を感じとりやすい楽器を鳴らして問いかけ、応答するように応えて鳴らす活動に取り組んだ。楽器を鳴らすと、何だろうと気づく様子があり、短いフレーズを繰り返し合奏することで、どのタイミングで鳴らすかが分かり、自分から鳴らそうとする様子が見られ、曲にのせて相互的なかわりに発展させることができた。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div> <p>③スクーリングで鎌フェス当日に発表 訪問教育で鎌フェスに向けて準備して、本番に母学級の友だちと一緒に発表したり、ビデオで参加したりした。人前で発表する機会が少ないので、貴重な経験になった。また、在宅訪問籍の児童生徒の様子を知ってもらう機会にもなった。</p>

# 施設訪問教育 令和7年度 校内研究報告

## 1. 研究テーマ

「意思決定支援に向けて：～表出を引き出すための授業実践～」

～子どもにとってわかりやすい環境づくり～

## 2. テーマ設定の理由・研究の方法

### (1) テーマ設定の理由

1、2年目の研究では、児童・生徒の実態をより正確に把握し情報共有することに重きを置いてきた。3年目となる今年度は、昨年度までに共有してきた実態を踏まえ、意思表示を引き出し、それを適切に捉えていくことを目指すこととした。そのために、児童・生徒が場面や状況をよりわかりやすい環境をつくることに着眼し、本テーマを設定した。

現在施設訪問の児童・生徒6名の内3名が「視力が弱い」という実態がある。そこで、今年度は視力の弱い児童・生徒の「朝の会」について研究することとした。「朝の会」は通年行っており、日々繰り返す内容も多いため、児童・生徒にとって意味理解につながりやすい。また、教員にとっても日々の表出や変化を捉えやすい場であると考え、加藤先生のアドバイスを受け、「朝の会」の内容を精選し改善を図った。

### (2) 研究の方法

視力の弱い児童・生徒を研究対象として「朝の会」の様子をビデオに撮り、表出や反応について検証した。表出が見られた場面、使用教材、支援や関わり方等、それらを担任間で共有し、その都度改善を図り、一貫性のある支援・指導を意識した。また、児童・生徒からの発信、表出を大切にしようと考え、呼名では、今までの名前を録音したビッグマックススイッチを押す方法から、それぞれのやり方で応えられるよう、適宜言葉をかけたり、促したりして、自らの表出方法に変えた。表出が出るまでに十分に時間をとり、表出が見られたら、加藤先生のアドバイス\*プロタクトイル「ことば+α」を実践してきた。

## 3. 研究の概要

### (1) 研究対象とする児童・生徒の実態について

研究対象 A	小学部 男子	研究対象 B	高等部 女子
	<ul style="list-style-type: none"><li>・視力についての詳細は不明である。</li><li>・神経系の問題により目でとらえた情報が脳まで到達していない。</li><li>・体の緊張が強く、眉間にしわをよせて身体をこわばらせることがある。</li><li>・音や声のする方へ頭を動かして顔を向けることがある。</li><li>・突発的な不随意的な動きでスイッチを押すことがある。</li></ul>		<ul style="list-style-type: none"><li>・視力が弱い。</li><li>・授業中発作が多く、体調のよい日は笑顔が見られ、声を出す等の表出も見られる。</li><li>・体調によって、ベッドで登校したり、欠席したりすることがある。</li><li>・聞いたことのある音楽には安心した表情を見せたり、笑顔になったりする。</li></ul>

## (2) 取り組みについて

加藤先生のアドバイスを基に、「朝の会」を、児童・生徒がより主体的に参加し意志表出につなげられるものになるよう以下の改善を図り取り組んだ。

- ① 朝の会の内容の精選と短縮
- ② ICT 機器のより良い活用（ぼいすぶっく、各種スイッチ）
- ③ 個々の実態に合わせるための工夫（はじまりの歌の導入、各種スイッチの活用 等）
- ④ 個々のペースに合わせた適切な言葉かけ等（呼名の際の表出の捉え方や、フィードバックの仕方等）
- ⑤ 触覚教材、聴覚教材の適切な活用（日づけ、天気、授業内容 等）

### 視力の弱い児童・生徒の「朝の会」

#### ○ ねらい

- ・自発的な動きで朝の会を進行する。
- ・呼名に対して自分のやり方で応える。（一人ひとりに目標を設定）
- ・様々な気づきを視線や表情、身体の動きなどで表出する。

#### ○ 取り組んだ内容

##### ① 朝の会の内容の精選と短縮



- ・朝の会の内容を 10 項目から6項目に削減
- ・児童・生徒主体の朝の会
- ・一人ひとりが日直を担当
- ➔項目を減らすことで時間に余裕ができ、表出が出るまでじっくりとかかわることができるようになった。また、一人ひとりが日直の役割を果たすことで、自己肯定感につなげることができる。

##### ② ICT 機器のより良い活用



- ・Keynote からぼいすぶっくに変更
- ➔画面が変わる時に音が鳴ることで、次へ進んだことがわかりやすくなった。また、ページの再生中に画面に触れても操作できないため、誤って違う画面が出てしまうことがなく、児童・生徒が自分で進めやすい。

③ 個々の実態に合わせるための工夫（はじまりの歌の導入、各種スイッチの活用）



- ・「はじまりのうた」教員が歌の中で「〇〇さん、おはよう」の言葉かけ、自分に向けられた挨拶であることがわかる。
- ・児童・生徒の様子を見ながら、言葉をかけたり、歌ったり、身体に触れたりしている。
- ➡教員と一緒に歌っているかのように口を開けたり、うなずいたり、声を出したりと様々な表出が見られるようになってきている。また、笑顔の場面も増えている。

研究対象：A



- ・身体の緊張が強い時には、様子を見てスイッチの種類を変えるなどして対応している。
- ・右腕の肘の付近にスイッチを置くと、突発的な不随意的な動きで腕を曲げたり伸ばしたりして、スイッチを押すことができる。(表出が見られたら即時にフィードバック\*「ことば+ $\alpha$ 」)
- ➡意識してスイッチを押そうとしている姿が見られるようになってきた。

研究対象：B



- ・スイッチは胸元に立てるような形で置く。手を胸元に引き寄せるような動作を使って、スイッチを押すことができる。
- ・その日の体調や様子で、スイッチの場所を変えている。
- ➡教員の言葉かけや肩に触れるなどのスキンシップで、声を出したり笑顔を見せたりすることが増えてきている。

④ 個々のペースに合わせた適切な言葉かけ等（呼名の際の表出の捉え方やフィードバックの仕方等）

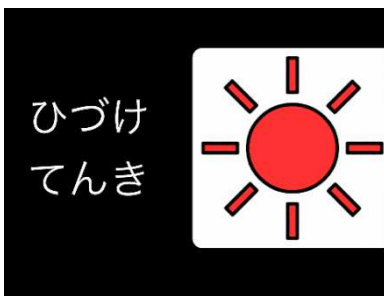


- ・呼名の応答の仕方について、個々に目標をたてた。
- ・一人ひとりの表出を大切に、時間をかけて本人からの発信を待つようにしている。
- ・表出が見られたら、\*「ことば+ $\alpha$ 」で言葉かけと一緒に肩に触れるなど意図的アクションをする。
- ➡普段は表出の少ない児童が、呼名の際に口を大きく開ける等の反応が早られるようになってきた。

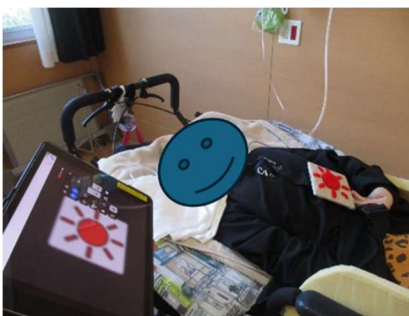
⑤ 触覚教材・聴覚教材の適切な活用

日づけ・天気

曜日・授業シンボル

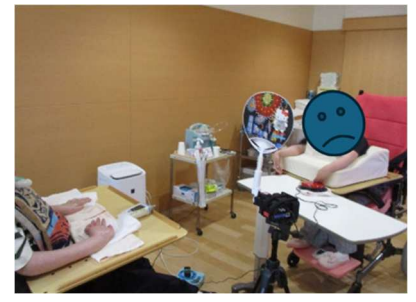


お天気確認の事例



・カーテンを開けた時の明るさ、お天気のイメージに合わせた音。  
 (晴れ、曇り、雨等)お天気カード等、聴覚や触覚等様々な感覚を使ってお天気を確認している。  
 ➡視線や頭を動かして、光や明るさを感じているような姿が見られるようになってきている。

ICT教材の活用事例



<iPad とタッチぴこスイッチ>  
 左足を横に振るような動きを活かして足でスイッチを操作、iPad で音楽を聞いたり止めたりする活動を行った。自分のペースで音楽を楽しんでいた。

<ミニキーボードとスピーカー>  
 肘の近くにミニキーボードを置き、脚の外側に振動スピーカーを設置。キーボードに触れるとスピーカーから出る音や振動に、目を大きく開いて視線を動かしていた。

<アームワンダとスイッチ>  
 アームワンダにうちわをつけてスイッチを押し、自分でうちわで仰いだり、友達に風を送ったりした。風を受けた時の友達の様子を見て笑顔を見せていた。

#### 4. 研究の成果

- ・児童・生徒の様子や変化、また、表出が見られた時の使用教材や支援・指導法について情報共有することで、指導の一貫性を図ることができた。
- ・加藤先生のアドバイスにより、児童・生徒の表出しやすい支援の仕方や関わり方、環境作りについて学び実践することで、今まで表出が小さく少なかった児童・生徒の表出する場面が増えてきた。また、「快、不快」の表出がわかりやすくなってきた。
- ・触覚、聴覚教材を工夫することで、児童・生徒が異なる感覚刺激を受け入れながら活動に取り組み、様々な反応が見られるようになってきた。
- ・情報専任の橋本先生に小さきで ICT 研修を実施していただき、アドバイスを受け、児童・生徒の実態に合った ICT 教材を活用することができた。ICT 教材を活用することで、表出の少なかった児童・生徒に変化が見られ、表出の幅が広がってきている。

#### 5. まとめ

今回の研究では、教員間の情報共有のあり方を見直し、個々に合わせた ICT 教材等の検討、活用を進めた。これにより児童・生徒が自信をもって表出し、「自分の動作で何かが起こる」という因果関係への気づきにつながったと感じている。また、児童・生徒からの表出に注目したことで、小さな表出を見逃さないという教員の意識の変化や、能力の向上にもつながった。今後も児童・生徒の表出を見極め、安心して活動に参加し、自ら発信できるような環境作りに努めたい。そして、授業、生活全般の中で自ら選択していけるように支援していきたい。

#### \*プロタクタイル（触覚言語 Pro-Tactile）

盲ろう者のコミュニティで盲ろう者によって開発された言語。英語や ASL（アメリカ手話）とは異なる、完全に触覚的な言語で、盲ろう者の体験を中心に据えた、触覚コミュニケーション。

- ・子どもと一緒に活動する中で、先生は側にいるよ、「そうそう、いい感じ！」など子どもと関わりながら、自然で、かつ過剰な刺激にならないよう子供にフィードバックすること。

→盲ろうの子どもにとっても、側にいる人の存在を感じ、必要な気持ちの支えになる方法の一つ  
Tap of Affirmation =肯定的なタップ（サイン）

※国立特別支援総合研究所 加藤 敦先生の資料より引用させていただきました。

知的障害教育部門 本校高等部 令和7年度 校内研究報告

1. 研究テーマ

「生徒が自分で考え、判断し、行動する場面を支えるための授業づくり

～3つの学習内容のカリキュラム検討～

2. 研究設定の理由

(1) 校内研究テーマである「意思決定支援を充実させる教育活動についての研究」を受け、R5年度より高等部B部門では、生徒一人ひとりの「意思決定（自分で考え、判断し、行動すること）できる力」を高めるために、全学年の授業における学習内容とその手立て・支援を充実させたいと考えた。そこで「意思決定できる力」を高めるための学習として「性教育（心とからだの学習）」「主権者教育」「防災教育」の3つの内容を取り上げることとした。

(2) 学部として系統性のある学習内容を学べることが望ましいと考え、昨年度までの研究内容を考察した上で、各学年の年間指導計画（社会生活）に位置付ける。（ただし、学年・生徒の実態に合わせて柔軟に編成する。）

来年度以降安定した授業実施を行うため、時期の見直しや実態に沿った内容となるように生徒の反応を記録することとした。また、指導案や教材を引き継げるようにすることで、いつでも・どこでも・誰でもが系統性のある授業を取り組めるように整備したいと考えた。

3. 研究の概要

<p>(1) R5年度より研究内容を考察した上で、「心とからだの学習」「主権者教育」「防災教育」を「社会生活(授業名)」(社会、自立活動、総合的な探究の時間)の年間指導計画に位置付けた。授業内容については、3年間で段階的に学べるように、学習内容に系統性を持たせることとした。 (PDCAのうちP【計画】とする)</p>	<p>※書式A</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td>昨年度の成果(抜粋)</td> <td></td> </tr> <tr> <td>今年度にむけた考察</td> <td></td> </tr> </table> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>★今年度の概要</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th colspan="4">年間指導計画</th> </tr> <tr> <th>学年</th> <th>時期</th> <th>授業内容</th> <th>教材等</th> </tr> <tr> <td>1年</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> <tr> <td>3年</td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	昨年度の成果(抜粋)		今年度にむけた考察		年間指導計画				学年	時期	授業内容	教材等	1年				2年				3年			
昨年度の成果(抜粋)																									
今年度にむけた考察																									
年間指導計画																									
学年	時期	授業内容	教材等																						
1年																									
2年																									
3年																									
<p>(2) 意思決定支援について研修等で学び、生徒自身の「意思決定できる力」、教員(支援者)の「意思決定支援」の在り方や必要なことを確認した上で授業に取り入れた。 (PDCAのうちP【計画】とする)</p>	<p>※書式B</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <td>参考資料 等</td> </tr> <tr> <td>その内容</td> </tr> </table> <p style="text-align: center;">↓</p> <p style="text-align: center;">学部では</p> <table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <tr> <th colspan="2">における意思決定支援</th> </tr> <tr> <td>生徒【意思決定できる力】</td> <td>教員【意思決定支援の在り方】</td> </tr> <tr> <td>・</td> <td>・</td> </tr> <tr> <th colspan="2">★具体的な授業内容</th> </tr> <tr> <td colspan="2">・</td> </tr> </table>	参考資料 等	その内容	における意思決定支援		生徒【意思決定できる力】	教員【意思決定支援の在り方】	・	・	★具体的な授業内容		・													
参考資料 等																									
その内容																									
における意思決定支援																									
生徒【意思決定できる力】	教員【意思決定支援の在り方】																								
・	・																								
★具体的な授業内容																									
・																									
<p>(3) (1)(2)を踏まえて、授業実践をした。 その後は、評価・課題の検討を行い、評価には、必要に応じて生徒向けアンケートを活用した。 (PDCAのうちD【実施】C【評価】とする)</p>	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <th rowspan="2">1年</th> <th colspan="2">D (実際の授業)</th> <th rowspan="2">C (生徒の反応や達成状況)</th> </tr> <tr> <th>授業内容</th> <th>どのように取り組んだか</th> </tr> <tr> <td></td> <td>・</td> <td>ねらい ・ 取組 ・</td> <td>・ アンケート※実施した場合 ・</td> </tr> <tr> <td>2年</td> <td>・</td> <td>ねらい ・ 取組 ・</td> <td></td> </tr> <tr> <td>3年</td> <td>※書式C</td> <td>ねらい ・ 取組 ・</td> <td></td> </tr> </table>	1年	D (実際の授業)		C (生徒の反応や達成状況)	授業内容	どのように取り組んだか		・	ねらい ・ 取組 ・	・ アンケート※実施した場合 ・	2年	・	ねらい ・ 取組 ・		3年	※書式C	ねらい ・ 取組 ・							
1年	D (実際の授業)		C (生徒の反応や達成状況)																						
	授業内容	どのように取り組んだか																							
	・	ねらい ・ 取組 ・	・ アンケート※実施した場合 ・																						
2年	・	ねらい ・ 取組 ・																							
3年	※書式C	ねらい ・ 取組 ・																							

(4) R6年度の加藤先生による授業見学・助言等も踏まえて、来年度以降の安定した授業実施にむけた学習内容の再選定や教材・手立ての確認を行った。(PDCAのA【改善】とする)

#### 4. 研究の成果

各学年の指導時期・内容を以下の通りにまとめた。

	心とからだの学習		主権者教育		防災教育	
1年	12月	・ライフサイクル ・プライベートゾーン ・人との距離感 ・月経と射精	7月 1月	・好きなものを選ぶ ・選挙の基本や投票 ・模擬投票、生徒会選挙	9月 12月	・災害や防災について知る ・地域の方とのフィールドワークによる危険個所の確認 (地域の方との交流会)
2年	12月	・プライベートゾーン ・妊娠・出産	7月 1月	・好きなものを選ぶ ・選挙の大切さを知る ・模擬投票・生徒会選挙	2月	・防災対策について学ぶ ・避難所について知る
3年	7月 12月	・妊娠・出産 ・すてきなおつきあい ・性被害等について	7月 1月	・好きなものを選ぶ ・国政選挙について知る ・模擬投票・生徒会選挙	9月	・災害時の対応について知る ・自分を守る方法を考える

社会人を目前とした高等部の学習において、系統性をもった指導によりこのような時にはどうしたら良いか・このような時にはこうした方がよい等、何かあった時に自分の力を高めるための学習を積み重ねることができるようになった。生徒から「相手を大切にするためには、自分を大切にしたい方がよい。」「相手を傷つけないためには、言葉だけでなく態度も大切。」「選挙の仕組みが分かった。」「きちんと政策を知らないといけない。」「演説を聞くことで、何をしたいかわかった。」「災害を経験した記憶があまりない。VRで見ることでこんなに大変なことになることを知れた。」「雨が降った時には、マンホールにも気をつけなければいけない。」「自販機は何かあった時の飲み物になることを初めて知った。」等々、学習の振り返りにて沢山の生徒の声を聞くことができた。毎年学習の途中や学習の最後で行うアンケートによる振り返りにて、生徒の声を聞きPDCAに活かしていくことが定着できた。

## ① 性教育

### ★今年度の概要

- ・今年度も年間計画をもとに1年：ライフサイクル・プライベートゾーン・人との距離感・月経と射精、2年：1年生の学習の振り返り・プライベートゾーン・妊娠と出産、3年：2年生の学習の振り返り・妊娠・出産・産道トンネル体験・素敵なお付き合い・性被害等について学習する。
- ・系統的な学習が行えるように、昨年度学習した指導時期を見直し生徒の学習が定着できる時期に行う。
- ・習熟度別の授業づくりをするだけでなく、全ての生徒が主体的に参加できるための手段としてアンケートを実施し、性についてどこまで理解しているのか、何について詳しく学習すべきなのかを確認できるようにすることとした。

学部	高等部B	学年	1年	場所	美術室→1-1・1-3	授業者	紀野・大橋・齋藤
授業日	令和 7年 12月 18日(木) 10:30 ~ :12:00【授業時間】						
授業名	心と体の学習② 第二性徴～月経射精について知ろう～男女別セルフケア						
授業のねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・思春期の体の変化について正しい知識を身につける。</li> <li>・男女別にセルフケアのポイントなどを知る。</li> </ul>						
時間	活動内容					指導上の留意点・配慮事項	
10:30	○美術室集合					<ul style="list-style-type: none"> <li>○スライドを見ながら、生徒に読ませたり、発問したりしながら進めます。</li> <li>○個人差の話や命に繋がる仕組みであることを抑える。</li> </ul>	
11:05	○スライドを見る。						
11:15	1 振り返り						
11:50	○思春期の心とプライベートゾーンの4つのないを確認						
11:55	2 からだの内側の変化 (性器の名前)						
11:55	3 月経・射精について知ろう						
11:50	○休憩 移動：女子 1-3 男子 美術室						
11:55	○男女に分かれてスライドを見ながら進める。						
	清潔・セルフケア ○ワークシート配布						
	○終わったひとからセルフケアのプリント実施						
	○号令をかけ挨拶。教室へ戻る。						
実践例紹介 心とからだ							性教育



### 授業に参加した生徒より

- ・自分が思っていたところがプライベートゾーンでなはかった。
- ・性について興味があるがどうして良いかわからないことがある。親には恥ずかしくて言えないが、先生には言える。相談しようと思った。
- ・清潔の大切さに気がついた。

## ②主権者教育

### ★今年度の概要

- ・引き続き、全学年共通して行うTシャツ作りと関連づけた「Tシャツ総選挙」でのデザイン決めや、生徒会役員選挙の事前学習を行う。それ以外でも、「〇〇選挙」と名付けた体験学習や、「自分で選ぶ→自分の希望が通った/通らなかったことを知る」ことを学校生活の様々な場面で経験できるようにする。
- ・参議院選挙に向けた模擬投票を体験することで、選挙に安心して参加する方法を知り、自分なりの参加方法を考える。
- ・習熟度別の授業づくりをするだけでなく、全ての生徒が主体的に参加・意思決定できるための手段として投票マッチング(自分が誰に入れたらいいかをしるヒントにつなげる)や代理投票制度(文字を書くことが難しい際の支援者による代理投票)についても検討・実施する。

### 年間指導計画

学年	時期	授業内容	教材等
各学年	7月～9月	「Tシャツ総選挙」 ・自分の好きなものを選び、投票する ・票数が一番多いものが当選することを知る	疑似投票箱、投票用紙
学部授業	7月  1月	「投票の体験をしよう」(模擬選挙事前学習) 「投票の体験をしよう」(模擬選挙)  「生徒会選挙」 ・投票の仕方、代理投票について知る	PP、投票箱、投票用紙、 PP、投票箱、投票用紙、ク ロームブック  PP、投票箱、投票用紙、

学部	高等部B	学年	全学年	場所	体育館	授業者	田村
授業日	令和 7年 7月 2日(水) 【授業時間】 10:30 ~ 11:50						
授業名	「主権者教育～投票の体験しよう～」						
授業のねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・選挙に関する基本的な知識・技能について理解する。(知識・技能)</li> <li>・選挙に安心して参加できる方法を知り、自分なりの参加方法を考える。(思考・判断・表現)</li> <li>・選挙体験学習に参加することができる。(主体的に取り組む態度)</li> </ul>						
時間	活動内容					指導上の留意点・配慮事項	
10:30	○体育集合・挨拶					・MT、スライドに注目できるように促す。	
10:35	○本時の確認(パワーポイント)						
10:45	○選挙について(パワーポイント)。						
10:55	○選挙「安心して参加しよう」(パワーポイント) ★投票の仕方、候補者の選び方について知る。						
11:00	休憩 ○選挙体験学習(鎌倉支援学校をよくしよう選挙) ・立候補者(教員3名)の話聞いた上で投票する。					・プロジェクターで票数がリアルタイムで見ることができるようにする。	
11:40	○選挙体験結果発表						
11:50	○ふりかえり ○終了・挨拶						



候補者役の教員の演説を聞き、  
自分の考えと近い人に  
投票をした。

即時開票し前のスクリーンに映すこと  
で、投票の様子がリアルタイムで  
分かるようにした。

しる じゆうや	きの たけみ	くりのら しゅうたろう
城 侑也	紀野 壮実	栗村 周太郎
1	1	1
2	2	2
3	3	3
4	4	4
5	5	5
6	6	6
7	7	7
8	8	8
9	9	9
10	10	10
11	11	11
12	12	12
13	13	13
14	14	14
15	15	15
16	16	16
17	17	17
18	18	18
19	19	19
20	20	20
21	21	21
22	22	22
23	23	23
24	24	24
25	25	25
26	26	26
27	27	27
28	28	28
29	29	29
30	30	30
31	31	31
32	32	32
33	33	33
34	34	34
35	35	35
36	36	36
37	37	37
38	38	38
39	39	39
40	40	40
41	41	41
42	42	42
43	43	43
44	44	44
45	45	45
46	46	46
47	47	47
48	48	48
49	49	49
50	50	50
51	51	51
52	52	52
53	53	53
54	54	54
55	55	55
56	56	56
57	57	57
58	58	58
59	59	59
60	60	60
61	61	61
62	62	62
63	63	63
64	64	64
65	65	65
66	66	66
67	67	67
68	68	68
69	69	69
70	70	70
71	71	71
72	72	72
73	73	73
74	74	74
75	75	75
76	76	76
77	77	77
78	78	78
79	79	79
80	80	80
81	81	81
82	82	82
83	83	83
84	84	84
85	85	85

授業に参加した教員より

- ・ユーモアを交えたことで生徒たちが興味を持ってよく聞いていた。
- ・候補者のマニフェストに分かりやすく差をつけることで「選ぶ」ことが理解できたと思う。
- ・投票数をスライドで表示することで、視覚的に理解しやすかった。生徒たちの間にも、緊張や臨場感が生まれ、興味をもってスクリーンに注目する生徒が多かった。
- ・リアルタイムで自分の1票の影響が見えることで、投票することへの価値を実感することができると思った。

③防災教育

学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開

第1章 学校防災の意義とねらい

(1) 防災教育

防災教育には、防災に関する基礎的・基本的事項を系統的に理解し、思考力、判断力を高め、働かせることによって防災について適切な意志決定ができるようにすることをねらいとする側面がある。また、一方で、当面している、あるいは近い将来予測される防災に関する問題を中心に切り上げ、安全の保持増進に関する実践的な能力や態度、さらには望ましい習慣の形成を目指して行う側面もある。防災教育は、児童生徒等の発達段階に応じ、この2つの側面の相互の関連を図りながら、計画的、継続的に行われるものである

国立特別支援教育総合研究所 災害時における障害のある子どもへの配慮

災害時には、周囲のかかわる人たちが、障害のある子ども一人一人の特徴や特性を理解して適切な配慮の下に、対応することが必要となります。災害時の障害のある子どもへの配慮は、障害のない子どもへの配慮と同様の内容が多くありますが、障害があることを踏まえての配慮が、特別に必要な場合があります。

学部では

防災教育 における意思決定支援

生徒【意思決定できる力】

- ・災害に関する知識理解を深める。
- ・自分で自分の身を守るために必要な知識技能を身に付ける。
- ・体験学習を積み重ねることで、主体的に行動できる力を身に付ける。

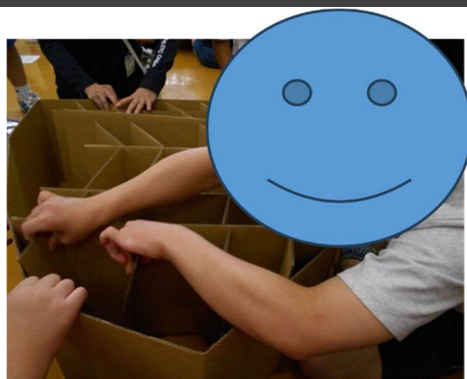
教員【意思決定支援の在り方】

- ・地域の人との交流学習や地域資源を活用した学習を通して、支援ネットワークを広げる。
- ・個別の支援計画等を活用して、災害時の個に応じた支援体制を整える。

★具体的な授業内容

- ・訓練を繰り返し行ったり、防災体験学習を積み重ねたりすることで、災害に関して身近なものとして考え、主体的に行動できるようにする。
- ・地域の人との交流学習を行い、支援ネットワークを広げる。また、第三者の立場から生徒に関わってもらいアンケート等をとることにより、生徒にとってどのような支援が必要であるかを考察する。

高等部 B 指導略案	高 B 社会生活/総合	場所：体育館等 ※詳細は活動内容に記載	授業者：各学部・学 年教員	
授業日	令和7年 9月30日(火) 10:40~12:00(公開授業)			
授業名	防災教育			
授業の ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・非常食調理や喫食、体験活動を通して、被災時の生活について考えることができる。</li> <li>・非常食調理や体験活動に自分から参加することができる。</li> <li>・発電機や簡易トイレ・段ボールベッド体験等を通して、使用方法を学んだり実際に使ったりすることができる。</li> </ul>			
時間	1年	2年	3年	分教室
10:40	生徒の学習活動 発電機(渡り廊下)	生徒の学習活動 段ボールベッド体 験・寝袋体験(体育 館)	生徒の学習活動 非常食調理(各クラ ス)	生徒の学習活動 Ipad 浸水、VR 煙体験 (昇降口)
10:50	↓ 非常食調理(各クラ ス)	↓ 非常食調理(各クラ ス)	↓ 発電機(渡り廊下)	↓ トイレ体験(体育館)
11:00	↓ Ipad 浸水、VR 煙体験 (昇降口)	↓ トイレ体験(体育館)	↓ 段ボールベッド体 験・寝袋体験(体育 館)	↓ 発電機(渡り廊下)
11:10	↓ ↓ トイレ体験(体育館)	↓ 発電機(渡り廊下)	↓ Ipad 浸水、VR 煙体験 (昇降口)	↓ 段ボールベッド体 験・寝袋体験(体育 館)
11:20	↓ ↓ ↓ トイレ体験(体育館)	↓ 喫食(各クラス)	↓ ↓ ↓ トイレ体験(体育館)	↓ 非常食調理・喫食(C 棟教室)
11:30	↓ ↓ ↓ ↓ ↓ 喫食(各クラス)	↓ Ipad 浸水、VR 煙体験 (昇降口)	↓ ↓ ↓ 喫食(各クラス)	↓ ↓ ↓ 給食・昼休み 振り返り
11:40	↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ 喫食(各クラス)	↓ 給食・昼休み 振り返り	↓ 給食・昼休み 振り返り	
11:50	↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ 喫食(各クラス)			
12:00	↓ ↓ ↓ ↓ ↓ ↓ 喫食(各クラス)			
13:00	↓ 給食・昼休み 振り返り			
実践例紹介 防災デー				防災教育



段ボールベッドや防災トイレを  
組み立てたり、段ボールベッド  
に実際に寝てみたりする体験

#### 授業に参加した生徒より

- ・実際にやってみることで、色々とわかってよかった。
- ・VR 体験を通して、こうなってしまう可能性があることがわかった。もっとやりたい。

## 知的障害教育部門 金井分教室 令和7年度 校内研究報告

### 1. 研究テーマ

「意思決定支援を充実させるための分教室での教育活動」

### 2. テーマ設定の理由

令和5年度から3年計画で研究を行う中で、分教室では、1年目は「個の意思決定」、2年目は「集団の中での意思表示」に焦点を当てて、意思決定支援の研究を進めてきた。日常の関わりや授業の中で、生徒一人ひとりの思いや考えを受け止め、選択や表現を支える実践を積み重ねてきた。しかし、それらの実践は個々の教員の経験や感覚に頼る側面も多く、分教室全体の取り組みとして整理する必要性があった。そこで3年目となる今年度の研究では、教員が日常的に行ってきた実践を「意思決定支援」という視点で可視化・共有し、分教室での教育活動として整理していくことを目的とした。

### 3 研究の概要

本研究では、意思決定を①情報の理解②記憶の保持③比較・検討④意思の表現の4つのプロセスが必要であると捉えた。また、意思決定は個人の内面だけで完結するものではなく、他者とのやりとりやコミュニケーションを通して形成・表明・実現されていく過程であると整理した。これらを踏まえ、日々の実践を①意思形成を支える関わり②意思表示を支える関わり視点から振り返ることとした。

まず、分教室職員12名を3グループに分け、ワーク形式で研究協議を行った。

#### (1) 可視化

各教員が、この1年間の中で「生徒が選んだ・決めた・伝えた」と感じた具体的な場面を付箋に書き出した。授業場面に限らず、学校生活全体での関わりを対象とした。

#### (2) 共有

グループ内で付箋を模造紙に貼り出し、各自がその場面について簡単に説明した。他の教員は評価や助言を行わず、実践をそのまま受け止めることを重視した。

#### (3) 整理

書き出された実践を、意思形成・意思表示の視点で分類し、どのような支援が行われていたのかをグループで検討した。

#### (4) 再構成

整理された実践を「意思決定支援に基づく支援方法一覧」にまとめ、分教室としてどのような力を系統的に育ててきたのかを確認した。



#### 4 研究内容・成果

##### (1) 意思決定支援を取り入れた授業・支援について確認

研究協議を通して、意思決定支援は新たに特別な指導を加えることではなく、日常的に行ってきた発問、待つ関わり、選択肢の提示、振り返りの場面そのものが意思決定支援であったことが明確になった。

##### (2) 学年間のつながりの可視化

1年次では「選ぶ・感じる・伝える」といった基礎的な経験、2年次では「自分の考えをまとめる・人に伝える」経験、3年次では「自分自身を理解し、強みや困りごとを含めて伝える」経験が積み重ねられていることが整理された。これにより、日常の取り組みは、系統性をもったカリキュラムとして構成されていることが確認できた。

##### (3) 教師間の共通理解の深化

「意思決定支援に基づく支援方法一覧」を意識しながら、共通の視点で授業を考えることで、教師間での理解が深まり、指導における生徒理解や支援について話し合える基盤が形成された。

### 意思決定支援に基づく支援方法一覧

#### ① 意思形成を支える関わり

1	・ロールプレイ、SST	情報の理解・記憶の保持
2	・ワークシート（⇒ファイリング）	記憶の保持
3	・メモの活用	記憶の保持
4	・視覚支援（スライド、模式図、イラスト）	情報の理解
5	・対話的授業（ペア、グループ活動）	比較検討
6	・振り返りの充実（アンケート、写真）	記憶の保持
7	・ICT活用（インターネット検索）	比較検討
8	・ICT活用（動画）	情報の理解

#### ② 意思表示を支える関わり

9	・言語化を助ける「気持ちカード」の活用	意思の表現
10	・ICT活用「Google フォーム」アンケート	意思の表現
11	・ICT活用「音声入力」	意思の表現
12	・選択式アンケート、選択式問題	意思の表現
13	・ICT活用「スライド作成」	意思の表現

## 【意思決定支援を意識した授業実践】

### 1年生 単元(題材)指導計画

部門 学部・学年	知的障害教育 部門高等部 分教室1年生	日時	令和7年 12月17日(水) 11:00~11:50	場 所	1年生教室
教科等の名称／指導の形態	進路学習	日課表・時間割表上の名称		進路	
単元(題材)名	ものづくりについてグループで調べよう				
重点をおく教科	社会 理科 職業				
単元(題材)の目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ICT 端末を使って、お菓子作りのこだわりや商品の特徴などを調べることができる。(知識・技能)</li> <li>・資料などを比較して調べたことをまとめ、イラストや図などを使って発表用のスライドを作ることができる。(思考力、判断力、表現力等)</li> <li>・グループの中で自分の役割を理解し、責任をもってグループに貢献しようとする。(学びに向かう力・人間性)</li> <li>・仲間の意見を聞き、考えを深めながら協力することしようとする。(学びに向かう力・人間性)</li> </ul>				
単元(題材)の指導計画					
時数	主な学習内容・学習活動 (※は重点をおく教科に合わせて、他教科等で育む資質・能力)			意思決定支援の視点	
				形成支援	表明支援
1	<b>【調べ学習のテーマ選び】</b> ・お菓子作りについて自分が調べたいテーマを選びグループに分かれる。 (A 技術 B おいしさの秘密 C 最新のお菓子) ・3人程度の話しやすいグループ人数で調べ学習を行う。			○	○
2~3	<b>【グループで調べ学習】</b> ・役割や分担をしてグループで調べる。 ・Google スライドのテンプレートをもとに、調べたことをそれぞれ記入していく。 ・調べる内容はグループで決めて発表に必要な素材を集めて記入する。 ・次回調べることをグループ内で決めて、決めたことをスライドに記録する。			○	○
4	<b>【森永工場 校外学習】</b> ・森永工場に行き、グループのテーマについて注目して見学し、わかったことや気になったことをメモする。			○	○
5~7 (本時)	<b>【スライドづくりと発表】</b> ・今まで調べたこと、工場見学でわかったことなどをまとめて、グループでスライドを作成する。 ・役割を決めて、テーマに沿った発表をする。			○	○
備考					

## 2年生 単元(題材)指導計画

部門 学部・学年	知的障害教育 部門高等部 分教室2年生	日時	令和7年 12月17日(水) 9:00~15:15	場所	2年生教室
教科等の名称 ／指導の形態	情報/教科別の指導	日課表・時間割表上の名称		情報	
単元(題材)名	「わたしのおすすめ」プレゼンテーション				
重点をおく教科	情報				
単元(題材)の 目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・フォントの変更やテキストボックスの拡大、移動等を活用して発表用のスライドを作成する。(知識・技能)</li> <li>・自身の思いを分かりやすく相手に伝えることを意識し、声量や身振り、スライドの活用を通して表現する。(思考力、判断力、表現力等)</li> <li>・他者の発表を聞き、良かった点をワークシートに記入することができる。(主体的に取り組む態度)</li> </ul>				
単元(題材)の指導計画					
時数	主な学習内容・学習活動 (※は重点をおく教科に合わせて、他教科等で育む資質・能力)	意思決定支援の視点			
		形成支援	表明支援		
1	<b>【プレゼンテーションの題材決め】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・以前にグループ発表で使用した発表スライドを振り返りながら、プレゼンテーションに必要な要素(スライドのわかりやすさ、面白さ等)を確認する。</li> <li>・発表時間やスライドの目標枚数を全体で話し合い、設定する。</li> <li>・クラスメイトに魅力を伝えたい題材とスライドの目標枚数を個別に設定する。</li> </ul>	○	○		
2~5	<b>【スライドと発表原稿の作成】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・スピーチのコツを解説する動画を視聴して、自身が目指すプレゼンテーションの完成形を確認する。</li> <li>・個別に自身のプレゼンテーションに必要なスライドと原稿の作成を行う。表現したい内容や Google スライドの使用方法について質問があれば、適宜教員に質問する。</li> <li>・原稿が完成した場合、実際に原稿を読んで発表時間を計測する。</li> </ul>	○	○		
6~7 (本時)	<b>【発表と発表視聴】</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・順番にプレゼンテーションを行う。</li> <li>・他者の発表を聞いている間は、ワークシートに発表の要点や感想を記入する。</li> <li>・個々のプレゼンテーションで良かった点を全員で共有する。</li> </ul>	○	○		
備考	美術:「自身のおすすめ」(人によって題材は本単元と異なる場合もあり)についてポスターを作成。①自己表現と②他者に伝えることを意識して活動する。				

### 3年生 単元(題材)指導計画

部門 学部・学年	知的障害教育 部門高等部 分教室3年生	日時	令和7年 12月17日(水) 11:00~11:50	場所	3年生教室
教科等の名称 ／指導の形態	国語/教科別の指導		日課表・時間割表上の名称	国語	
単元(題材)名	「ぼくのニセモノをつくるには」～じぶん研究をしよう～				
重点をおく教科	国語				
単元(題材)の 目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の特徴や好きなことを言葉で表すことができる。(知識・技能)</li> <li>・自分の特徴や合理的配慮を、相手にどのように伝えたらよいか考える。(思考力、判断力、表現力等)</li> <li>・自分のよさや個性を見つけようとする。他者の発表を聞き、よさを認めようとする。(学びに向かう力、人間性等)</li> </ul>				
単元(題材)の指導計画					
時数	主な学習内容・学習活動 (※は重点をおく教科に合わせて、他教科等で育む資質・能力)	意思決定支援の視点			
		形成支援	表明支援		
1	<b>【じぶん研究について知る。】</b> ・絵本を聞き、内容を確認する。 ・じぶん研究のステップを知る。 ① じぶんの特徴を整理する ② 困った時に依頼したいことを整理する ③ 人間関係をマップにする ④ まとめ	○			
2	<b>【じぶんの特徴をまとめよう】</b> ・「好き・きらい」「できること・できないこと」を書き出す。 ・自分の強みについて考える	○			
3					
4	<b>【困ったときをお願いしたいことを整理しよう】</b> ・自分の不得意なことと工夫を書き出す(合理的配慮につなげる)	○			
5	<b>【人間関係マップをつくる】</b> ・自分を中心として、人間関係をマップに書き出す。	○			
6	<b>【じぶん研究をまとめよう】</b> ・ニセモノの名前・特徴・すごいところを文章にまとめる。 ・クラスで発表し、他者の発表を聞いて「いいね！」カードで承認する。	○	○		
備考					

## 5 まとめ

意思決定支援を充実させるためには、生徒の発信を待ち、受け止め、意味づける教師の関わりが重要であることが改めて示された。また、実践を可視化し共有することで、個々の教師の経験が分教室全体の知見となり、カリキュラムマネジメントへとつながることが明らかになった。

今回整理した視点を日常の授業づくりや学級経営の中で意識的に活用するとともに、分教室としての意思決定支援の取り組みを継続・発展させていくことが重要である。本研究で整理することができた視点を基に、学年間のつながりや指導内容の系統性を意識しながら意思決定支援をカリキュラムとして具体化していくことができれば、より充実した教育活動につながるであろう。

## 6 参考文献・資料

- ・鎌倉支援学校校内研究会スライド資料 2023, 2024, 2025（外部助言者 特別支援教育総合研究所加藤敦氏作成）
- ・愛知教育大学附属岡崎小学校著『自らの力で判断・決定していく子ども』2017
- ・志賀利一ほか『見てわかる意思決定と意思決定支援』2016

## 「子供たちの意思決定の力を育む授業づくり」を通して

近年、「意思決定」「意思決定支援」というキーワードが様々な場面で取り上げられています。次期学習指導要領改訂に向けた特別支援教育ワーキンググループにおいても、福祉等との連携や子供主体の自立活動の更なる展開の視点から、子供自身の自己選択・自己決定に資する指導内容の充実、個々の児童生徒が自己の意思を表明できるような指導内容を新たに盛り込むことなどが検討されています。

自己選択、自己決定は、ある日突然できるようになるものではありません。幼少期から様々な体験や経験、人との関わりを通して育まれていく力だと考えます。子供たちの障害の状態や発達段階は様々ですが、日々の授業や学校生活の中で、子供が主体的に考え、判断し、表現する力をどのように育てていくかという視点は、すべての学部に通ずる課題です。今回、3年間の学校研究に関わらせていただく中で、各学部の実践から、意思決定支援を視点にした授業づくりには、次の3つの要素が重要であると感じました。

### ①信頼関係の構築と子供の意思の形成を支える環境を整えること

子供と教師の信頼関係は、学校生活すべての基盤です。その上で子供が自分の意思(思いや考え)を形成していくためには、今いる環境や状況、活動の意味や目的が理解できること、教師が伝えていることの内容や意味が理解できることが重要です。子供が安心して活動でき、見通しをもって取り組むことができる、興味・関心をもち意欲的に向かおうとすることができるためには、人的・物的両面からの環境の設定が重要になります。子供が「安心できる」「分かる」「できる」と感じられる教師の関わり方の工夫と環境を整え、豊かな双方向のやりとりを重ねていくことが、子供の意思形成を支える基盤になると考えられます。

### ②子供が意思を表出できる方法を探り、提供すること

子供が自分の意思を表す方法は、必ずしも音声言語だけとは限りません。呼吸、表情、視線、身振りや行動、実物や写真、絵カード、ICT 機器など、様々なコミュニケーション手段があります。一人一人の特性や理解の仕方に応じて、その子供が最も伝えやすく、相手に伝わる実感を得られる方法を見だし、関わり手の間で共有し、保障していくことが、子供の意思表明を支える重要な支援となります。

### ③子供の意思が尊重され、可能な範囲で実現される場を提供すること

子供の意思が周囲に受け止められ、活動の中で実際に反映される経験は、次の意思形成につながる重要な経験になります。授業や生活の中で子供の意見や選択が尊重される場面、教師や友達とのやりとりを通して意思を調整したり共有したりする経験を積み重ねることが、主体的な学びを支えます。

各グループの報告には、これらの要素が子供たちの実態や授業内容等に応じて検討され、随所に盛り込まれています。授業実践を基にした検討や学部間の情報共有を通して、教師一人一人が自らの実践を振り返り、改善し、共有してきたプロセスそのものが、教師の専門性の向上と学校としての教育力の向上につながっていると感じます。鎌倉支援学校が取り組んだ実践研究の特徴は、教師自身が日々の授業の中で子供と向き合いながら課題を見だし、試行錯誤しながら指導を改善していく点にあります。子供の姿や成長は、実践の成果を示す重要な手がかりとなり、私たちに新たな気付きを与えてくれます。自らの実践や教師自身の意思決定を言語化し、可視化して共有、省察することは、子供の成長を支えるとともに、学校全体の教育を発展させていく基盤にもなります。3年間の校内研究で積み重ねられてきたこれらの取組と具体的な実践が、鎌倉支援学校における今後の授業づくりと子供たちの意思決定を支援する教師一人一人の丁寧な関わり方の基盤となり、子供たち一人一人の主体的な学びと生活の充実につながっていくことを期待しています。

国立特別支援教育総合研究所 主任研究員 加藤 敦